

野瀬遺跡

淡河地区農業基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

神戸市教育委員会

野瀬遺跡

淡河地区農業基盤整備事業に伴う
埋藏文化財発掘調査報告書

2002

神戸市教育委員会

序

神戸市北区に広がる淡河町は、豊かな自然に溢れ、のびやかな文化が継承されている地域です。町内には淡河城や石峯寺などの文化財が存在し、伝統的な茅葺民家も多数残されており、国際港湾都市神戸のもうひとつの顔をみせています。

近年は山陽自動車道が開通するなど、田園景観も変貌しつつありますが、21世紀を迎えて、新たな淡河町を創造するその第一歩を刻みはじめています。

こうしたなか、農業基盤整備事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を行ってきましたが、この度淡河町野瀬で実施された調査の報告書を刊行することとなりました。調査では、建物や生産関連遺物など当時の集落の姿をかいまみる資料が発見され、さらなる歴史的事実が解きあかされようとしています。

本書が、地域の歴史と文化を学ぶ資料として、また文化財保護への理解を深めて頂ける一助となりましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたり快くご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に感謝いたします。

平成14年3月

神戸市教育委員会
教育長 木村 良一

例　　言

1. 本書は、神戸市北区淡河町野瀬字津本、北垣、中鳩、辻町、小南、沢に所在する野瀬遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は農業基盤整備事業に伴うもので、神戸市教育委員会と財団法人神戸市体育協会が、神戸市産業振興局の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査の体制は本文（第Ⅰ章）に記した。
4. 発掘調査の実施に際しては、神戸市産業振興局、淡河土地改良区および地元在住の方々のご協力を得ました。
5. 発掘調査段階と本書とでは調査次数の表記が異なる。本書では第1次-1調査を確認調査、第1次-2調査を第1次-1調査、第2次調査を第1次-2調査と改称している。
6. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1「有馬」、同5万分の1「神戸」、神戸市発行の2千5百分の1「淡河天神橋」を使用した。
7. 本書で使用した方位は国土座標第V系を基準にし、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。第1次-1調査の遺構実測図方位は座標北を指す。第1次-2調査の平面図方位は磁北を指す。
8. 遺構の実測および浄書、遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、三木雅子の補助を得た。遺物実測は佐伯が担当した。
9. 遺物の写真については、独立行政法人奈良文化財研究所牛嶋　茂氏の指導を得て、杉本和樹氏が撮影した。また遺物のX線写真および顕微鏡写真については、千種　浩・中村大介が撮影した。
10. 本書の執筆は各調査担当者が分担して行い、金属器関係については、千種・中村の協力を得た。編集は各調査担当者の協力を得て佐伯が担当した。

本文目次

序

例言

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 調査組織	4
第Ⅱ章 地理と歴史	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 確認調査	
第1節 調査の概要	9
第2節 遺物	12
第3節 小結	13
第Ⅳ章 第1次-1調査	
第1節 調査の概要	15
第2節 遺構と遺物	19
第3節 小結	32
第Ⅴ章 第1次-2調査	
第1節 調査の概要	34
第2節 遺物	34
第3節 小結	36
第VI章 製鉄関連遺物	
第1節 鉄滓	37
第2節 編羽口・炉壁	40
第3節 小結	40
第VII章 まとめ	44

図目次

図1 野瀬遺跡位置図	1	図11 I区北半遺構平面図	18
図2 野瀬遺跡位置図	2	図12 SB01平・断面図	18
図3 調査地位置図	3	図13 SB02平・断面図	19
図4 周辺の遺跡分布図	6	図14 SB03平・断面図	20
図5 確認調査 トレンチ・試掘坑配置図	10	図15 SB04平・断面図	21
図6 出土遺物実測図	13	図16 SB05平・断面図	22
図7 トレンチ土層断面図	14	図17 溝出土遺物実測図	23
図8 第1次-1調査地位置図	15	図18 SD03平・断面図	24
図9 調査区平面図	16	図19 SK01平・断面図	25
図10 I区土層断面図	17	図20 SK05, 06平・断面図	25

図21 SK06出土遺物実測図	26	図30 SX07平・断面図	33
図22 SK08平・断面図	26	図31 出土遺物実測図	33
図23 SK08出土遺物実測図	26	図32 第1次-2調査位置図	35
図24 SK10平・断面図	27	図33 第3調査区半・断面図	36
図25 SK09, 10出土遺物実測図	27	図34 出土遺物実測図	36
図26 SX02平・断面図	28	図35 鉄滓出土地点と類型	38
図27 SX02出土遺物実測図	29	図36 類型別比重分布	39
図28 SX06平・断面図	31	図37 輪羽口実測図	41
図29 SX06出土遺物実測図	32		

表 目 次

表1 試掘調査一覧	2	表3 鉄滓資料一覧(1)	42
表2 鉄滓出土地点別組成	37	表4 鉄滓資料一覧(2)	43

写 真 図 版 目 次

図版1 1. 野瀬遺跡遠景(東から)		図版10 1. 第1調査区(南から)	
2. 野瀬遺跡遠景(北から)		2. 第2調査区(南から)	
図版2 1. SX06出土輪羽口(78~80)		3. 第3調査区(南東から)	
2. SX06出土鉄滓		図版11 確認調査出土遺物	
図版3 1. 3tre.(北から)		図版12 1. 溝出土遺物	
2. 22tre.-a(北西から)		2. SK06出土石造品	
3. 25tre.-a(南から)		3. SK08,10出土遺物	
図版4 1. 調査地全景(西から)		4. SX02出土遺物	
2. 調査地遠景(東から)		図版13 1. SX02下層出土遺物	
図版5 1. I・II区北半(南東から)		2. SX02最下層出土遺物	
2. I区北半(北から)		図版14 1. SX06,07出土遺物	
3. SD01(北西から)		2. SX06出土遺物	
図版6 1. SD03(南西から)		図版15 1. 包含層・ピット出土遺物	
2. SD20,21(北東から)		2. 包含層ほか出土金属器	
3. SK05(北西から)		図版16 1. 第1調査区出土遺物	
図版7 1. SK06縫検出(北西から)		2. 第2調査区出土遺物	
2. SK06半掘(北西から)		3. 第3調査区出土遺物	
3. SK08(南西から)		図版17 SX06出土鉄滓(1)	
図版8 1. SK10(北西から)		図版18 SX06出土鉄滓(2)	
2. SK11,13(北西から)		図版19 SX06出土鉄滓断面	
3. SX02(北西から)			
図版9 1. SX06(北東から)			
2. SX06半掘(北西から)			
3. SX07(北西から)			

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

神戸市北区淡河町は市域の北方に位置し、西は三木市、北は吉川町と市境を接する。町の中心部を西流する淡河川沿いには、かつては湯山街道、現在は県道三木三田線が通っており、東播地域と北摂地域を結ぶ主要交通路となっている。

この地域は、国際港湾都市神戸にあっても自然が豊富に残り、農業生産の場として重要な位置を占める。民家は開析された丘陵地内に散在しており、神戸市内で最も茅葺民家の分布密度が高い地域である。野瀬地区はその淡河町域の東端に位置している。

近年、農業基盤整備事業に伴い淡河町内の各地区で圃場整備がおこなわれてきたが、野瀬地区においても事業が計画された。

事業地内の埋蔵文化財に関しては状況が全く不明であったため、圃場整備工事に先立ち平成7年度から平成9年度にかけて試掘調査を実施した。その結果、中世の須恵器、土師器、陶器のほかにサスカイトなどが出土し、溝やピットなどが検出されて、野瀬遺跡として認知されるに至った。

この結果を受けて、遺構や遺物包含層などの埋蔵文化財が確認された区域のうち、工事計画で埋蔵文化財に影響を及ぼす部分についてのみ発掘調査をおこなうこととなった。



図1 野瀬遺跡位置図

第2節 発掘調査の経過

試掘調査は、平成7年度から平成9年度にかけて淡河川南岸の野瀬地区を対象にして計520か所実施された。その結果、南北約500m、東西約1.2kmの範囲内で、遺構や遺物包含層が検出されたり、地形や土層の状況から遺跡が存在する可能性が高いと思われる区域が数か所に分散して確認された。

表1 野瀬地区試掘調査一覧

年 度	調査期間	試掘箇所	面 積
平成7年度	平成7年4月27日～平成7年5月19日	118か所	270m ²
平成8年度	平成8年12月9日～平成8年12月27日	187か所	420m ²
平成9年度	平成9年4月9日～平成9年5月2日 平成10年1月12日～平成10年1月19日	196か所 19か所	784m ² 70m ²

確認調査

試掘調査によって遺構や遺物包含層が検出された範囲について、確認調査としてトレーニによる調査を実施することとなった。まず次年度施工予定範囲から始め、掘削は水路および切上部分に限っておこなった。調査は重機と人力を併用して掘削し、記録作業の後、順次埋め戻しながら進めていった。

第1次-1調査

確認調査の結果を受けて、遺構が密集して検出された2、3トレーニ部分の調査を実施した。重機で耕土と遺物包含層までの土層を除去し、人力で遺物包含層の掘削、遺構検出と掘削をおこなった。遺構掘削後は、ヘリコプターにより空中写真測量を実施した。

第1次-2調査

確認調査の結果を受けて、字中嶋と字沢に位置する水路部分について調査を実施した。調査方法は重機で耕土を除去し、人力で遺物包含層の掘削と遺構面積査をおこなった。

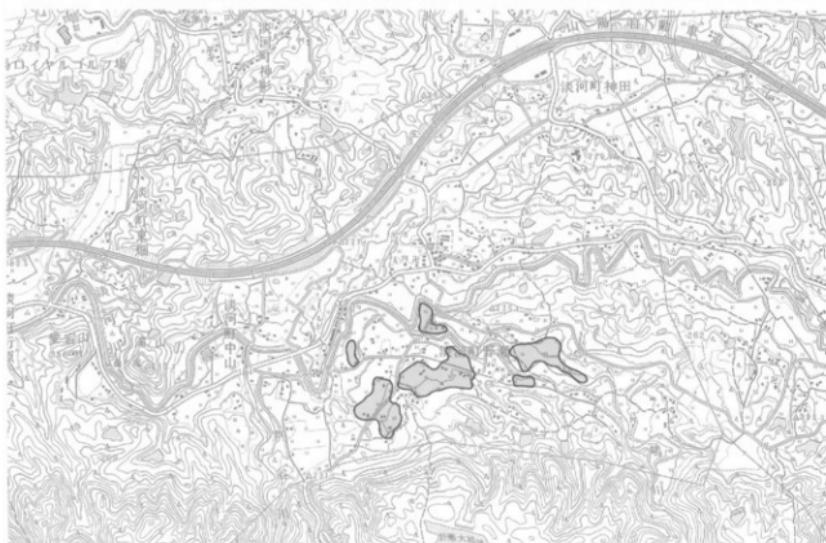


図2 野瀬遺跡位置図 (S=1/25,000)



図3 調査地位置図

第3節 調査組織

現地における発掘調査は、平成12年度に神戸市産業振興局の委託を受け、神戸市教育委員会と財団法人神戸市体育協会が実施した。また、平成13年度には、出土遺物の整理と報告書作成業務をおこなった。これらの調査・整理に伴う組織は以下の通りである。

平成12年度 〔発掘調査〕

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当
権上 重光 前神戸女子短期大学教授
和田 晴吾 立命館大学文学部教授
工渠 善通 財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

教育委員会事務局

教育長	木村 良一	財団法人神戸市体育協会 会長	笠山 幸俊
社会教育部長	水田 裕次	副会長	鞍本 昌男
文化財課長	大勝 俊一	(専務理事事務取扱)	
社会教育部主幹	渡辺 伸行	副会長	山田 隆
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	ク	ク	家治川 豊
事務担当学芸員	西岡 誠司	常務理事	木村 良一
ク	東 喜代秀	参事	静視 圭一
ク	橋詰 清孝	総務課長	財田 美信
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明	事業係長	前田 豊晴
文化財課主査	宮本 郁雄	総務課主査(兼務)	瀬田 吉則
ク	丸山 謙	ク	丸山 謙
ク	菅本 宏明	事務担当学芸員	菅本 宏明
事務担当学芸員	山口 英正	調査担当学芸員	斎木 嶽
保存科学担当学芸員	千種 浩		佐伯 二郎
ク	中村 大介		
調査担当学芸員	阿部 敏生		
ク	井尻 格		

平成13年度 〔整理業務〕

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当
権上 重光 前神戸女子短期大学教授
和田 晴吾 立命館大学文学部教授
工渠 善通 財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

教育委員会事務局

教育長	木村 良一	財団法人神戸市体育協会 会長	笠山 幸俊
社会教育部長	岩畔 法夫	副会長	鞍本 昌男
文化財課長	桑原 泰農	(専務理事事務取扱)	
社会教育部主幹	渡辺 伸行	副会長	山田 隆
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	ク	ク	家治川 豊
事務担当学芸員	山口 博史	常務理事	木村 良一
ク	西岡 誠司	参事	梶井 昭武
ク	橋詰 清孝	総務課長	財田 美信
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明	総務課主幹	前田 豊晴
文化財課主査	宮本 郁雄	総務課係長	奥田 哲通
ク	丸山 謙	総務課主査(兼務)	松田 保
ク	菅本 宏明	ク	丸山 謙
事務担当学芸員	千種 浩	事務担当学芸員	菅本 宏明
遺物整理担当学芸員	斎木 嶽		厚志
保存科学担当学芸員	黒田 勝正		
	中村 大介		

第Ⅱ章 地理と歴史

第1節 地理的環境

淡河町 野瀬遺跡が所在する北区淡河町は、神戸市域の北方に位置しており、西は三木市、北は吉川町と市境を接する。北側は丘陵地帯が広がりいくつもの小さな谷が存在し、南側には標高約600mの帝釈山地が存在する。中央部には加古川水系である淡河川が東西に蛇行して流れ、僧尾川や鳴川などの小河川を集めながら三木市に入って山田川と合流する。淡河川沿いは標高100mから200mの細長い盆地状地形となっている。

基盤層 丘陵地の基盤層は、新生代第三紀中新世に堆積した神戸層群であり、高槻一有馬構造線に属する淡河断層を境として、南側は有馬層群からなる帝釈山地となる。神戸層群は比較的軟弱な地盤であるため浸食を受けやすく、淡河川沿いには開析されてできた段丘が発達している。

微地形 淡河川沿いの盆地は、淡河町東端にある愛宕山と滝山によって東西に二分される。調査地のある野瀬は淡河町でも東端近くに位置しており、東側は八多町屏風となる。上淡河の中心的地域でもある。

調査地は淡河川と鳴川との合流地点の南側、芦谷川と鳴川に挟まれた範囲で、比較的広い中位から高位にかけての河成段丘上に立地する。段丘面上には小さな開析谷が刻まれているが、一部は圃場造成のため埋没している。標高は約200～220mである。背後には帝釈山地からの山塊が迫り、いくつかの小尾根が北あるいは北西方向に延びる。また野瀬大池池からの谷筋には小規模な扇状地が見られる。

第2節 歴史的環境

淡河町は都市部に比べ開発速度が緩やかであったが、近年の大規模な圃場整備や道路建設に係わる発掘調査で多くの遺跡が発見され、資料が蓄積されつつある。ここでは発掘調査成果をもとに、淡河の歴史の一端をたどり概観する。

縄文時代 淡河町域で最古の資料とされるのは、萩原遺跡16から出土した縄文時代草創期の有茎尖頭器である。それに統いて中山大池遺跡4で前期の土器が採集されている。

淡河中村遺跡19では中期後葉の竪穴住居が2棟検出され、そのうち1棟の貯蔵穴からは石棒が直立した状態で出土した。

萩原遺跡16では、後期の竪穴住居が確認され、包含層から打製石斧が出土している。萩原城遺跡15でも、後期の深鉢や石斧、石鏃などが出土し、竪穴住居も検出されている。

また晩期後葉と思われる粗製深鉢が淡河中村遺跡19で出土している。

その他詳細な時期は不明であるが、勝雄遺跡20、淡河本津遺跡14、九田遺跡13、西北遺跡11、木ノ元遺跡10などで石鏃が出土し、平井沢遺跡12ではサスカイト製スクレーパー、中山遺跡5ではチャート製を含む石鏃、石匙と磨石と思われるものが確認されている。神

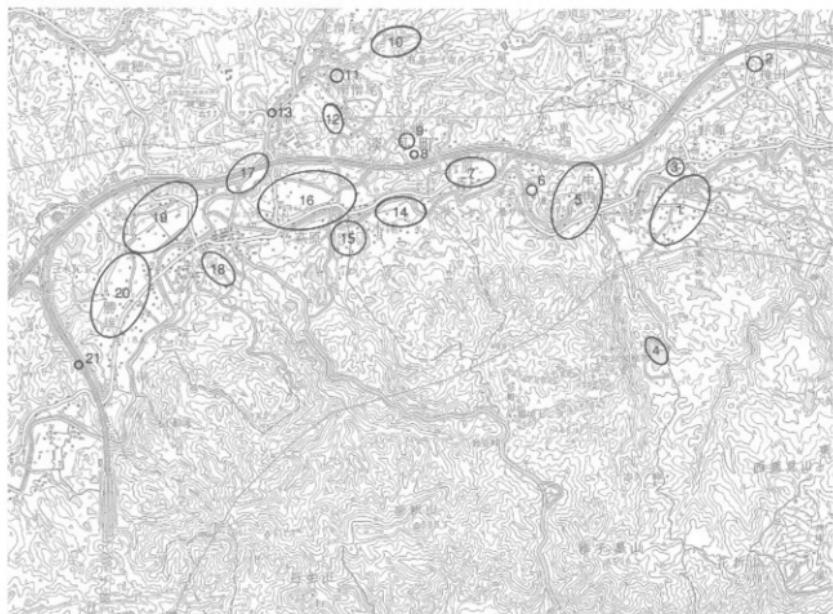


図4 周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

1 野瀬遺跡	8 宮ノ沢城跡	15 萩原城遺跡
2 神田遺跡	9 南浦遺跡	16 萩原遺跡
3 野瀬城	10 木ノ元遺跡	17 奥遺跡
4 中山大柏池遺跡	11 西北遺跡	18 淡河城遺跡
5 中山遺跡	12 平井沢遺跡	19 淡河中村遺跡
6 東畠遺跡	13 九田遺跡	20 勝雄遺跡
7 行原遺跡	14 淡河木津遺跡	21 勝雄経塚

田遺跡2からは、後期以降と思われる石鎚や石匙があり、北僧尾の試掘調査では石槍が出土している。⁽¹⁰⁾

このように縄文人の狩猟活動の足跡は各地で見つかっているが、検出された住居は地域や時期が限られており、長期にわたる集落は形成されなかったものと思われる。

弥生時代 弥生時代は、出土した遺物もごくわずかで遺跡数も少ない。前期の資料は知られていないが、宮ノ沢城跡8では中期の高坏が、行原遺跡7でも中期の土器が出土している。勝雄遺跡20では第1次調査で中期と思われる台形土器が出土し、第3次調査では後期の多角形の可能性がある竪穴住居や土坑を検出している。⁽¹¹⁾また、淡河城遺跡18では終末期の竪穴住居が確認されており、次第に集落としての様相をあらわすようになる。

古墳時代 古墳時代になると淡河本町を中心に遺跡が展開する。淡河中村遺跡19では前期の布留式併行期の竪穴住居が検出され、中から刀子と見られる鉄製品と釘が出土した。⁽¹²⁾また、韓式土器も出土しており、朝鮮半島との関連がうかがえる。萩原遺跡16からは、6世紀後半の

豎穴住居や5世紀後半から7世紀にかけての須恵器が出土している。勝雄遺跡20では後期の柵列が検出されている。しかし、生活の痕跡は残っているものの古墳は1基も確認されておらず、特異な地域といえる。

飛鳥時代～奈良時代 続く飛鳥時代から奈良時代にかけて、集落は変化を遂げる。淡河中村遺跡19では、掘立柱建物の柱掘形から奈良時代の土器が出土している。勝雄遺跡20では、飛鳥時代に竈を造り付けた豎穴住居が確認され、奈良時代には大型の柱掘形をもつ掘立柱建物や溝、土坑などが検出されている。このことは豎穴住居から掘立柱建物へと推移する状況を明確に示しており、良好な資料となっている。また、特殊な遺物も出土しており、一般集落とは一線を画する。しかし、掘立柱建物群は平安時代には廃絶され、暫し空白期間が生じる。

平安時代～室町時代 平安時代は遺跡数が減少して遺物出土量も少なく、中山遺跡5や萩原遺跡16、奥遺跡17などで9世紀から10世紀代の遺物が知られる程度である。また、文献上に淡河の名が登場するのもこの時期である。

平安時代末から鎌倉時代にかけて遺跡が急増する。この背景には、石峯寺に代表される寺院勢力による莊園獲得や、在地領主の勢力増大があるものと思われる。

萩原遺跡16では、11世紀代の遺物が出土しており、この時代において比較的早くから開発された地域である。12世紀後半の井戸側平面が六角形を呈する井戸も検出されており、富裕層の存在も想定されている。以後、萩原遺跡では14世紀代までの遺物が出土しているが、地区によっては耕作地であったり、時期によって遺物量が増減するなど、均一的な推移ではない。

淡河中村遺跡19では11世紀後半の掘立柱建物が検出されている。同遺跡では続く12世紀中頃から13世紀中頃までの掘立柱建物が知られており、継続して集落が営まれたことがうかがえる。

勝雄遺跡20では、12世紀前半と考えられる掘立柱建物以降、13世紀前半の土坑や落ち込みが検出され、室町時代に属する掘立柱建物も確認されている。このことから、勝雄遺跡では12世紀から13世紀前半に開発が進んだことがうかがえる。その後15世紀に入り再び活発な開発が行われており、室町時代以降、相当規模で水田造成もなされたようである。ほかに詳細な時期は不明なもの、木棺墓や土壙墓が確認されている。

萩原城跡遺跡15では、12世紀末から13世紀前半、13世紀後半から14世紀の遺構、遺物が知られる。

東畑遺跡6では、12世紀末あるいは13世紀前葉に屋敷が造営されはじめ、14世紀頃に一時弱まるものの、15世紀に再び屋敷が出現し、16世紀後葉まで継続している。

行原遺跡7では、12世紀末から13世紀の掘立柱建物や火葬土坑が確認されている。

淡河木津遺跡14では13～15世紀に位置づけられる掘立柱建物や圍池遺構を検出しているほか、13世紀の土壙墓が発見されている。土壙墓からは青磁碗、鉄刀、火打金が出土している。南浦遺跡9からは13世紀の遺物、宮ノ沢城跡8からは13世紀後半から14世紀にかけての遺物が出土している。また西北遺跡11では、13世紀代の遺構も検出されているが、中心となるのは16世紀後半のものである。

以上から、11世紀代に淡河本町周辺の淡河中村遺跡19や萩原遺跡16から開発が進み、12

世紀代には隣の勝雄遺跡20へ、また萩原城遺跡15や東畠遺跡6へと次第に周囲へ拡がっていったと考えられる。淡河木津14や南浦9、西北11などの諸遺跡は他の遺跡より若干遅れて13世紀代に形成されていったようである。

この時期、末法思想を背景として各地で多くの経塚が造られた。淡河でもいくつか確認されており、そのうち勝雄経塚21では金銅製經筒内に紙本経がほぼ完全な状態で残存しており、注目される。

室町時代も後半に入ると、戦乱の世の情勢を受けて、淡河にも多くの城が築かれた。淡河城18は、この時期に現在のように整備されたものと思われる。萩原城遺跡15は発掘調査が行われ、掘立柱建物や構列、石垣、堀など16世紀の城郭構造が解明されている。⁽⁴²⁾

野瀬遺跡の北側には野瀬城3が存在したとされる。かつては堀切りや土塁などが見られたらしいが、現在では確認できない。⁽⁴³⁾

天正6年（1578）に始まる羽柴秀吉の播州攻めに対し、淡河城主淡河定範は三木城主別所長治のもとでこれに対抗するが敗退し、淡河の地域も兵火にみまわれる。淡河城には戦功のあった有馬氏が入城するが、慶長6年（1601）には三田移封により淡河城は廃城となる。その後、近世の淡河は湯山街道筋の町として栄えていった。

註

- (1) 村尾政人・山谷朋世『淡河萩原遺跡第Ⅲ・Ⅳ・V次発掘調査報告書』淡河萩原遺跡調査団・株式会社雁文 1999
- (2) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史』歴史編1自然・考古 1989
- (3) 村尾政人『淡河中村遺跡』淡河文化財協会・淡河中村遺跡調査団 1992
- (4) 前掲註(4)
- (5) 『淡河萩原遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）』淡河文化財協会・淡河萩原遺跡調査団 1992
- (6) 畠田恭正『萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
- (7) 前掲註(5)
- (8) 西岡久次ほか『勝雄遺跡Ⅰ』神戸市教育委員会 2000
- (9) 内藤俊哉・中村人介『淡河木津遺跡第1次調査』平成9年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会 2000
- (10) 阿部敬生ほか『南浦尾』神戸市教育委員会 2000
- (11) 阿部朝治『淡河中山道遺跡発掘調査報告書』Ⅰ 淡河文化財協会・淡河中山道遺跡調査団 1993
- (12) 村尾政人・山谷朋世『淡河萩原遺跡第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ次 淡河中山道遺跡Ⅱ次発掘調査報告書』淡河萩原・淡河中山道遺跡調査団 1999
- (13) 内藤俊哉『神田遺跡』平成2年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会 1993
- (14) 前掲註(10)
- (15) 鶴郷一嘉ほか『宮ノ沢跡 宮ノ沢跡・宮ノ沢跡・南浦跡 発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1996
- (16) 球磨弘ほか『石原遺跡第2・4次調査』平成3年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会 1991
- (17) 前掲註(14)
- (18) 宮本都雄『淡河城跡発掘調査概要』神戸市教育委員会 1977
- (19) 丸山漸ほか『淡河中村遺跡』昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会 1994
- (20) 前掲註(3)
- (21) 前掲註(1)
- (22) 前掲註(12)
- (23) 前掲註(8)
- (24) 谷正徳『淡河中村遺跡』平成元年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会 1992
- (25) 前掲註(8)
- (26) 前掲註(11)
- (27) 村尾政人『淡河萩原遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）』淡河文化財協会・淡河萩原遺跡調査団 1992 および前掲註(1)
- (28) 前掲註(15)
- (29) 前掲註(5)
- (30) 前掲註(1)
- (31) 前掲註(1) (5) (12)
- (32) 前掲註(3)
- (33) 前掲註(8)
- (34) 前掲註(6)
- (35) 岩崎直也・中田昌幸『東畠・南浦遺跡発掘調査報告書』阪神文化財調査会 1999
- (36) 前掲註(16)
- (37) 前掲註(9)
- (38) 前掲註(36)
- (39) 前掲註(15)
- (40) 前掲註(10)
- (41) 山下史郎ほか『勝雄跡』兵庫県教育委員会 1997
- (42) 前掲註(6)
- (43) 「日本城郭全集10」1967

第Ⅲ章 確認調査

第1節 調査の概要

確認調査は、平成7年度から平成9年度の試掘調査によって遺構や遺物包含層が確認された範囲のうち、切土や排水路など埋蔵文化財に影響を及ぼす部分について、遺構の有無や密度、その分布範囲を確認するためにおこなった。

調査方法は、より正確な状況を把握するため対象地に幅15mのトレンチ（以下tre.と表記）を設定して重機で掘削し、遺構検出は人力でおこなった。また重機の進入が困難な部分については、試掘坑（以下T.P.と表記）を設定し人力で掘削した。調査終了後は、埋め戻しをおこない耕地を復元した。

調査地は宇津本、北垣、中嶋、辻町、小南、沢と広範間にわたる。

字津本に位置する1～9 tre.・T.P. 1～4は、津本池の谷筋と北に延びる小尾根に挟まれた高位段丘上に立地する。地山面の標高は、213.7～220.3mである。

1 tre.-a 東端は耕土・床土直下で地山面となるが、西端は旧耕土が堆積する。北西～南東方向の鋤溝が検出された。遺物は、褐灰色粘性砂質土から須恵器、土師器、陶器、サヌカイトが出土している。

1 tre.-b 褐灰色粘性砂質土から須恵器、土師器、青磁が出土している。

1 tre.-c 西半はすぐに地山となる。北西～南東方向のにぶい黄褐色粘性砂質土を埋土とする溝と、にぶい黄褐色砂混じり粘土を埋土とする溝状の落ち込みを検出した。褐灰色粘性砂質土から須恵器、土師器、陶器が出土している。

1 tre.-d 西端で田園造成に伴う落ち込みを検出した。

2 tre. ほぼ床土直下で遺構面となる。北半でピットと土坑、南半で溝を検出した。褐灰色粘性砂質土から須恵器、土師器、陶器、サヌカイトが出土している。

3 tre. 主に北半でピット、土坑、溝などが多く検出された。褐灰色粘性砂質土から、須恵器、土師器、瓦質土器や鉄滓などが出土している。2,3 tre. については、一部遺構を掘削し、時期の把握に努めた。

4 tre.-a 東端は耕土直下で地山となり、そこから西側へ緩く傾斜していく。西半でピットと溝を検出した。灰色シルトから、須恵器、土師器、青磁が出土している。

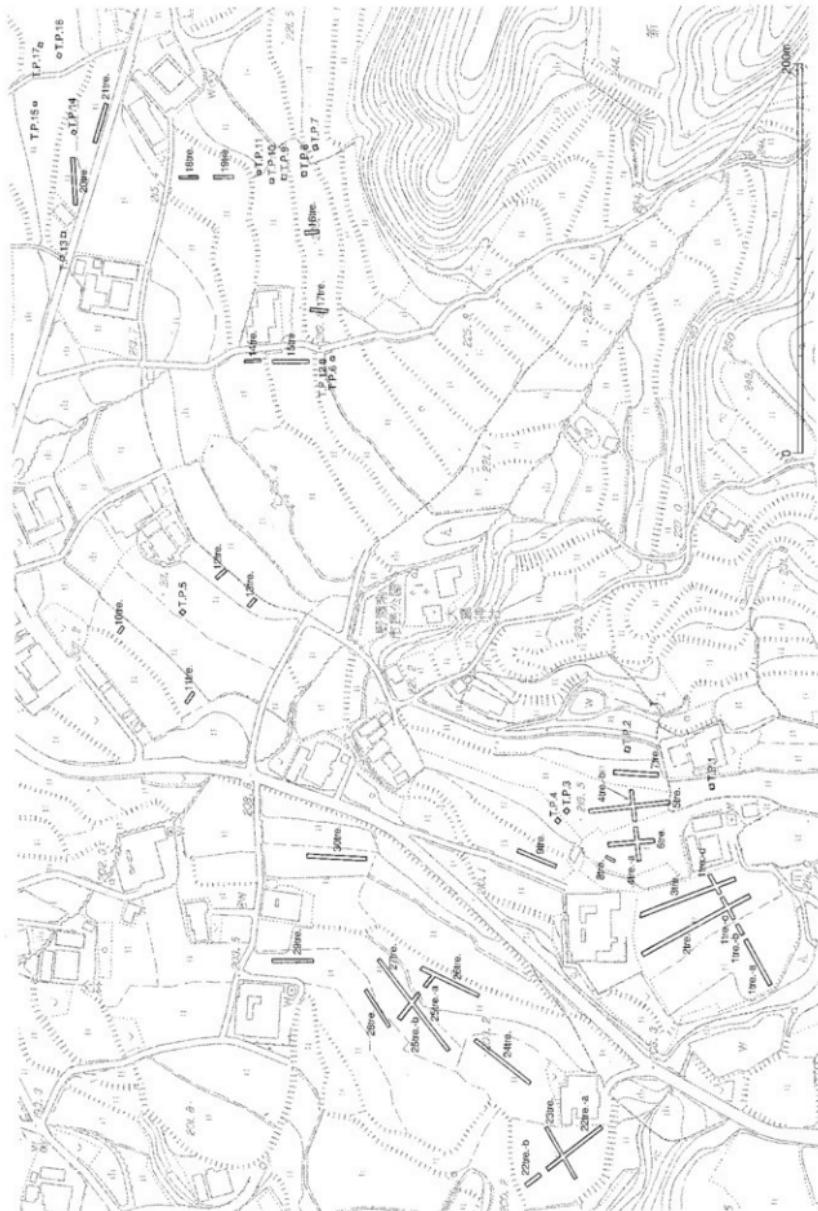
4 tre.-b 東端で、直径約1mの円形土坑を検出した。灰色シルトから須恵器、土師器、陶器が出土している。

5 tre. 南半で南西方向への溝状落ち込みを検出した。北端は軟弱な地盤で、獸足痕と思われるくぼみを検出した。灰色シルトから須恵器、土師器、陶磁器が出土している。

6 tre. 灰色シルトから須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、錢貨などが出土している。

7 tre. 小尾根西側の斜面地にあたる。地山面は南西側へ傾斜する。灰色シルト～粘土から須恵器、土師器、磁器、瓦器、石鐵が出土している。

図 5 確認測量 トレーナー・試掘坑配置図



- 8tre. 地山面には獸足痕と思われるくぼみが多数存在する。灰色シルトから須恵器、土師器、陶器が比較的多く出土している。
- 9tre. 径数十cmの円形土坑2基のほかに、北端で傾斜変換線を検出した。灰色シルトから須恵器、土師器、陶器、磁器が出土している。
- T.P. 1 旧耕土が堆積する浅い落ち込みを検出した。須恵器、土師器が出土している。
- T.P. 2 小尾根西側の斜面地にあたる。地山面は西側へ傾斜する。灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- T.P. 3 灰色細砂から須恵器、土師器が出土している。
- T.P. 4 灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。

- 字北垣に位置する10~13tre.・T.P. 5は、野瀬大柏池に端を発する小河川が形成した北西に広がる小さな扇状地上に立地する。地山面の標高は、208.1~212.0mである。
- 10tre. 北西方向に傾斜しており、灰色シルトが厚く堆積する。地山面は礫が目立つ。灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- 11tre. 北西方向に傾斜しており、地山面も堆積土も礫が目立つ。灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- 12tre. 灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- 13tre. 灰色シルトから須恵器、土師器、陶器が出土している。
- T.P. 5 灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。

- 字中嶋に位置する14~19tre.・T.P. 6~12は、先述の 小扇状地東側と、鳴川左岸の丘陵裾部から段丘上に立地する。地山面の標高は、216.2~222.0mである。
- 14tre. 北側に緩やかに傾斜していく。灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- 15tre. 北半は盛土が著しい。ピットを数基検出した。灰色シルトから須恵器、土師器が比較的多く出土している。
- 16tre. 軟弱な淡灰色シルトが厚く堆積し、地山面は北側へ緩やかに傾斜する。灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- 17tre. 軟弱な淡灰色シルトが厚く堆積し、地山面は北側へ緩やかに傾斜する。灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- 18tre. 灰色粘性シルトから須恵器、土師器が出土している。
- 19tre. 土坑状の落ちを検出した。灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- T.P. 6 耕土から須恵器、土師器、陶器が出土している。
- T.P. 7 遺物は出土していない。
- T.P. 8 遺物は出土していない。
- T.P. 9 灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- T.P. 10 淡灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- T.P. 11 灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。
- T.P. 12 堆積土・地山ともに礫が多い。遺物は出土していない。

字辻町に位置する20~21tre.・T.P. 13~17は、鳴川左岸の段丘上に立地する。地山面の標高は、211.0~214.9mである。

20tre. 西半は谷状に落ち込む。灰色シルトから比較的多くの須恵器、土師器が出土した。

21tre. 西端で田圃の段差を確認した。東端は耕土直下で地山となる。灰色シルトから比較的多くの須恵器、土師器、瓦器、青磁が出土している。

T.P.13 灰色シルトから須恵器が出土している。

T.P.14 灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。

T.P.15 盛土から須恵器、土師器、陶器、旧耕土から須恵器、土師器が出土した。

T.P.16 灰色粘性砂質土から須恵器、土師器が出土している。

T.P.17 暗灰色粘性砂質土から須恵器、土師器が出土している。

字小南・沢に位置する22~30tre. は、小さな谷に挟まれた舌状の段丘上に立地する。段丘面は字津本より一段低位である。地山面の標高は、201.3~205.9mである。

22tre.-a 南半で幅約1.2mの溝と、北半でピット、土坑を検出した。褐色砂質土から須恵器、土師器、青磁、サスカイトが、また溝理上から須恵器が出土している。

22tre.-b ピットを検出した。灰色粘性砂から須恵器、土師器が出土している。

23tre. 褐色砂質土から小片であるが比較的多くの須恵器、土師器が出土した。

24tre. 中央で谷状地形を検出した。淡灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。

25tre.-a 暗灰色砂質土から石礫、灰色シルト質細砂から須恵器が出土している。

25tre.-b 灰色シルトから須恵器、土師器が出土している。

26tre. 灰色シルト質細砂から須恵器が出土している。

27tre. ピットおよび土坑を検出した。北西端は比較的軟弱な地盤となる。須恵器、土師器、サスカイトが出土している。

28tre. 落ち込みとピットを検出した。灰色細砂混じりシルトから須恵器、土師器、遺構埋土の黒褐色シルトから土師器が出土している。

29tre. 南半で土坑と溝を検出した。灰色シルト混じり細砂から須恵器、土師器、陶器が出土している。

30tre. 溝状落ち込みと土坑を検出した。須恵器、土師器が出土している。

第2節 遺物

今回の調査では、遺物包含層や遺構から主に中世の須恵器、土師器などが出土した。

1は須恵器壺蓋で、口径は15cmである。平安時代のものと思われる。2、3は須恵器碗で、口径約14cm、高さ約3cmを測り浅いタイプである。4は須恵器小皿で、口径8.1cm、高さ12cmである。5は須恵器鉢で、口径27cmである。2~5は13世紀から14世紀前半頃のものと思われる。6は香炉と思われる上師器で、3方向に脚が付き、体部外面に花文のスタンプを押捺す。

7はチャート製石鏸で、現存長1cm、幅1.4cm、厚さ2mm、重さ0.25gである。先端部が

欠損する。8はサスカイト製石錐で、長さ1.8 cm、現存幅1.35cm、厚さ2.5 mm、重さ0.36 gである。片方の脚部先端が欠損する。

9～11は鉄製品である。9は釘で、頭部は使用のため変形しているものと思われる。10は、幅1.2cm、厚さ4.5mmで、先端部が直角に折れ曲がる。11は楔状の鉄製品である。

12は祥符元宝（初銅1009年）で、外径3.25～4.0cm、厚さ1 mm、重さ3.5 gである。

その他、同化にはいたらなかったが、突出した底部をもつ須恵器碗や土師器鍋、瓦質土器、青磁碗、陶器甕、焼土・炉壁などが出土している。

第3節 小結

以上の結果から、2～6, 8, 9 tre.、15tre.、18, 19tre.、22, 23, 25-b, 27～30tre.を含む範囲については、中世期の遺跡が広がるものと思われる。その他の調査区については、遺物が出土する箇所も存在するが、その出土状況や地山面の状況から濃密な遺構の検出は期待できないと思われる。

遺構は、特に3tre.で集中して検出された。土坑や溝のほかにピットが多く検出され、建物が存在する可能性が高い。

遺物についてはほとんどが小片であるが、須恵器、土師器、陶器などが出土しており、主に鎌倉～室町時代のものと考えられる。そのうち1は若干時代を遡るものである。また鉄滓も出土しており、製鉄関連遺構の存在が想定できる。

その他、縄文時代と考えられる石錐とサスカイト片が出土している点から、縄文時代の遺構や遺物が発見される可能性が考えられる。石錐を含めたサスカイトは1, 2, 7, 22, 25 tre.で出土しており、調査範囲中でも西側に偏っていることがうかがえる。

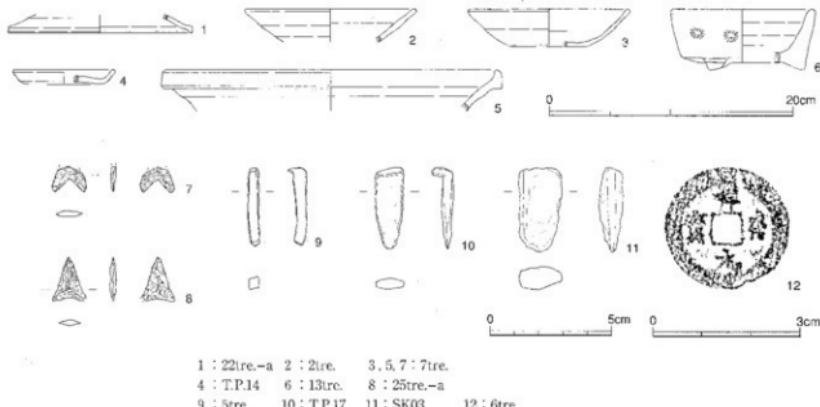
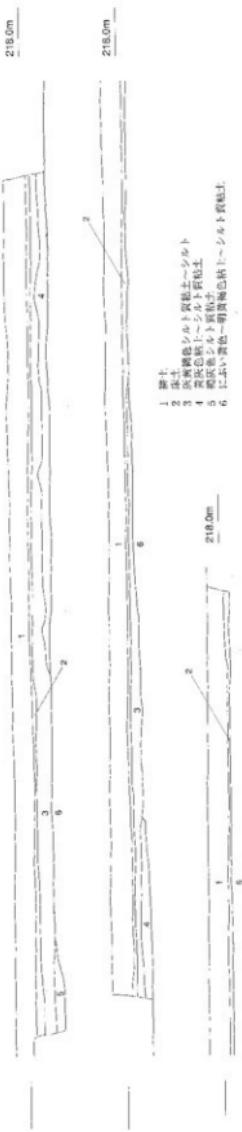
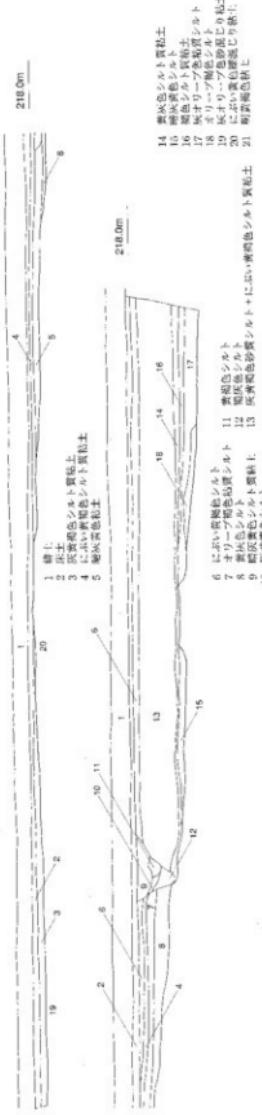


図6 出土遺物実測図

6re. 西壁



15re. 西壁



22tre-a 西壁



図 7 トレチ土層断面図

第IV章 第1次-1調査

第1節 調査の概要

第1次-1調査は切土部分が対象で、確認調査によって遺構と遺物の集中が最も認められた1tre.-c.d.、2,3tre.部分にある。調査地は宇津本に位置し、北に延びる小尾根の西側斜面、背後に山塊が迫る高位段丘上に立地する。東側はさらに一段高くなっている、段丘面が広がる。西側はもう二枚の田圃を経て、津本池が存在する谷に落ち込んでいく。現況は北西-南東方向の2枚の田圃になっており、標高は215.4mから216.2mである。調査は現在の圃場面にあわせて調査区を設定して、東側の上段をI区、西側の下段をII区とし、それぞれ北半と南半に二分して遺物の取り上げや遺構の把握に便宜をはかった。

遺構面は東から西へごく緩やかに傾斜する地形で、標高は215.0～215.8mである。遺構面は現代の田圃造成の影響で、I区とII区の間に段差を生じている。また、田圃の区画と思われる段差をI区東側とII区西端で確認しており、かつては4枚以上の細い田圃が存在していたと類推される。遺構の密度はI区北半が高く、II区東側は削平のため残存状況が悪い。また、南端は津本池に続く谷地形となっており、遺構は存在しない。

なお、遺構番号については確認調査で検出できた遺構はそのまま使用し、あらたに検出した遺構は続きの番号を探った。

基本層序 I区の基本層序は、耕土・床土・灰褐色砂混じり粘土あるいはオリーブ褐色粘土の遺物包含層・明褐色～にぶい黄橙色粘土の地山=遺構面となる。西側の段差部分には灰黄褐色粘土、明黄褐色粘土、灰色砂混じり粘土、褐色シルト質粘土、暗灰黄色シルト質粘土が堆積する。II区の基本層序は、耕土・床土直下で黄褐色粘土の地山=遺構面となる。南側では、地面上に灰オリーブ色砂混じり粘土が堆積し、西側の段差部分には灰黄褐色砂混じり粘土（旧耕土）、暗灰黄色粘土、黄褐色粘土、にぶい黄褐色砂混じり粘土が堆積する。概して遺物包含層は薄く、10cm未満である。



図8 第1次-1
調査地位位置図



図9 調査区平面図

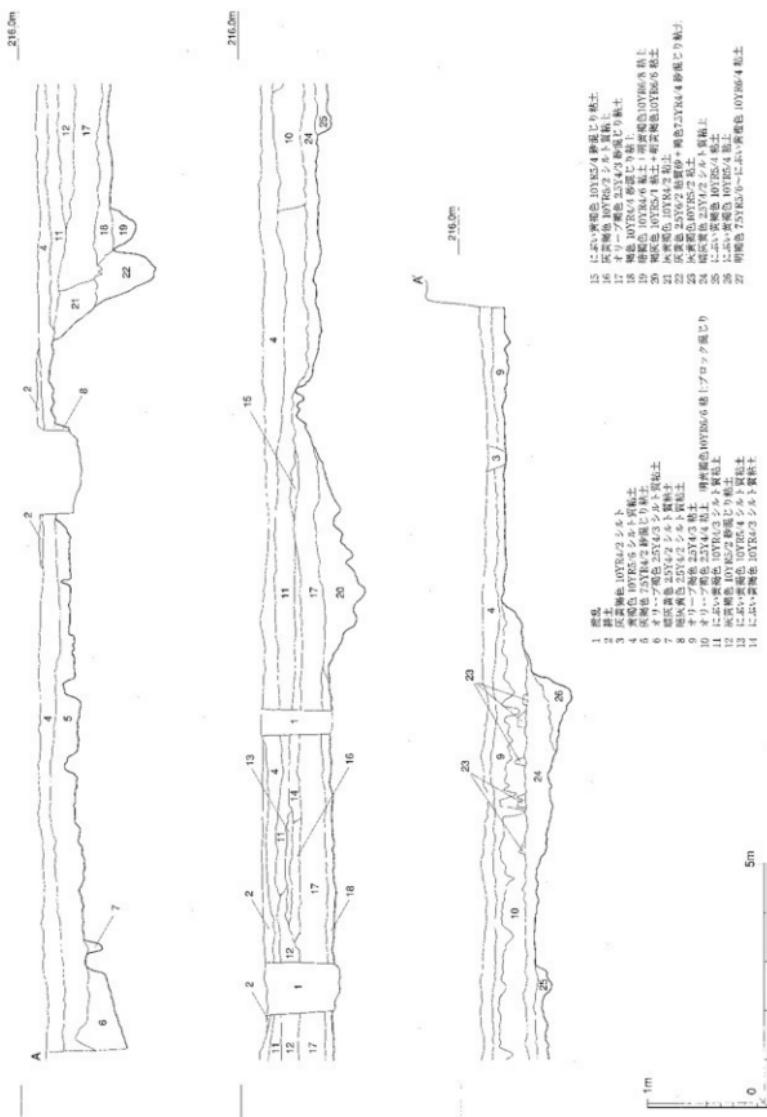


図10 土壌断面図

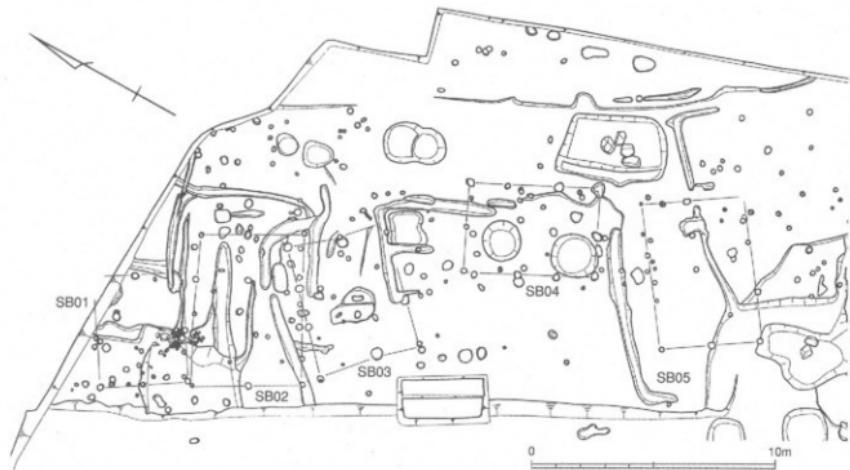


图11 I区北半遗构平面图

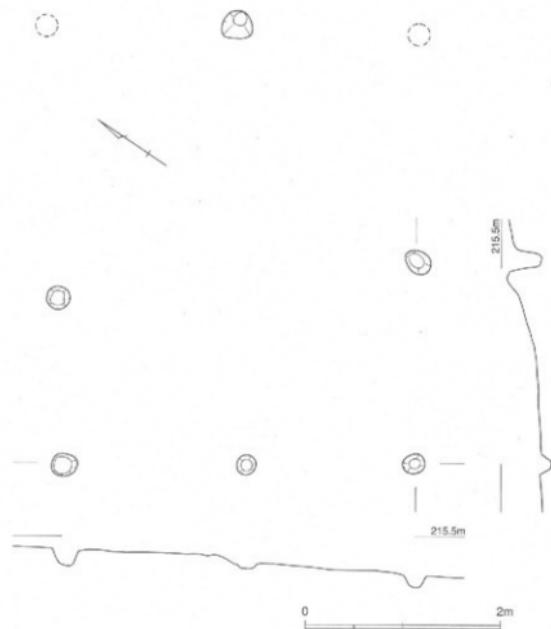


图12 SB01平·断面图

第2節 遺構と遺物

掘立柱建物は全てI区北半で検出している。

SB01 東西2間、南北2間の側柱掘立柱建物で、南北軸をN34°Wにとる。東南隅はSK16のため、北東隅は調査区外のため不明である。柱間寸法は1.7~2.1m、柱穴掘形は平面円形

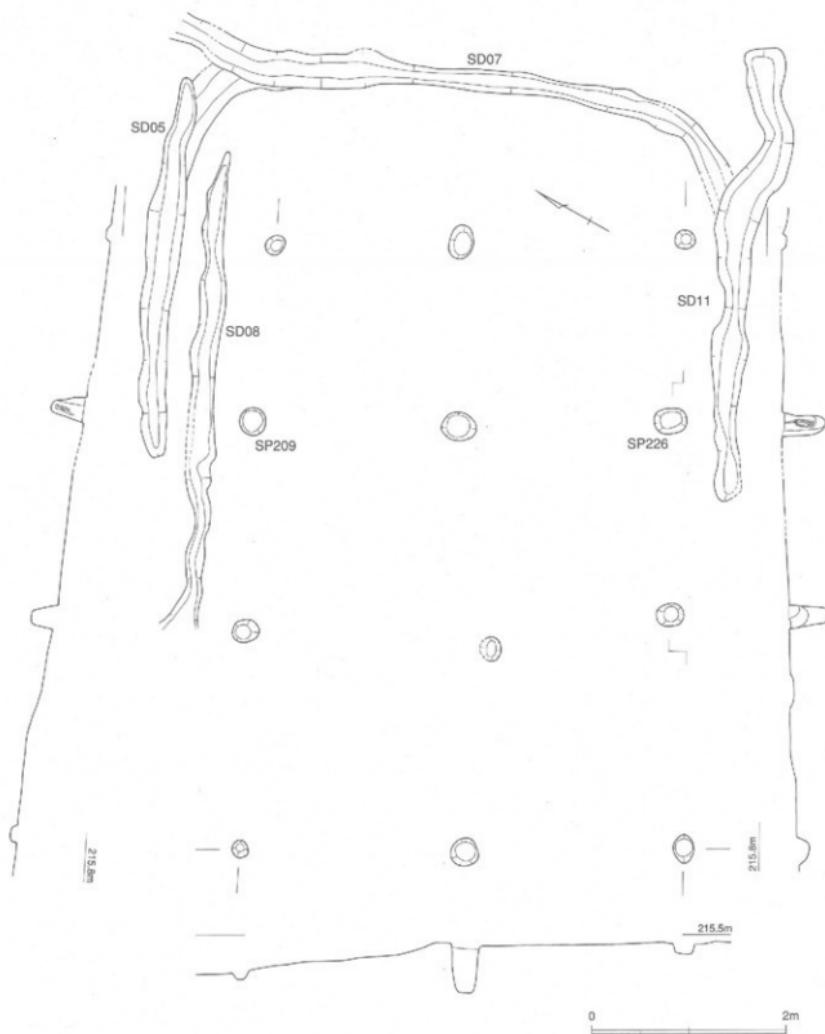


図13 SB02平・断面図

で、径20~32cm、深さ12~32cmである。埋土は主として灰黄褐色粘質土で、遺物は出土していない。

SB02 東西3間、南北2間の総柱掘立柱建物で、南北軸をN28°Wにとる。東半をSD05, 07, 08, 11がコの字状に巡る。削平されて不明であるが、あと何間か西側に続いていく可能性もある。柱間寸法は1.8~2.5mで、柱穴掘形は平面円形から橢円形をしており、径20~36cm、深さは10~50cmであるが東辺は深さ5~10cmと浅い。埋土は灰黄褐色シルト質粘土で、北辺中央のSP209と南辺中央のSP226から柱材と思われる木片が出土した。



図14 SB03平・断面図

- SB03** 東西3間、南北2間の掘立柱建物で、平面台形を呈し、南北軸をN43°Wにとる。一部他の構造で不明な柱穴がある。北側から東側北半にかけてSD10, 18が巡る。柱間寸法は1.6~2.5mで、柱穴掘形は平面円形で、径20~60cm、深さ18~40cmである。西辺中央と東辺中央のSP232, 400は他の柱穴より若干大きい。SP235, 400はやや隅丸方形である。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、柱痕はオリーブ褐色粘質土である。SP232から炉壁と焼土、SP70, 218, 400からは柱材と思われる木片が出土した。
- SB04** 東西2間、南北3間の掘立柱建物で、南北軸をN27°Wにとる。立地する遺構面は周囲よりも若干低い。柱間寸法は1.6~2.2mで、柱穴掘形は平面円形から歪な楕円形をし、径20~50cm、深さ13~47cmである。概して東側の柱穴が深い。埋土は暗黄褐色粘質土で、SP255, 257から礫と柱材と思われる木片が出土した。なお、SP257はSK06を切っている。
- SB05** 東西3間、南北2間の偏柱掘立柱建物で、南北軸をN35°Wにとる。北辺と西側北端部にSD19が巡る。南西側の柱穴はSX02埋土上面より検出した。これらは軟弱な埋土上にあるため、根石を据えたり柱穴も比較的深い。柱間寸法は1.9~2.2m、柱穴掘形は平面円形で、径13~30cm、深さ5~32cmである。埋土は暗灰黄色シルト質粘土で、SP267から土師器小皿と青磁、SP22から須恵器碗が出土している。



図15 SB04平・断面図

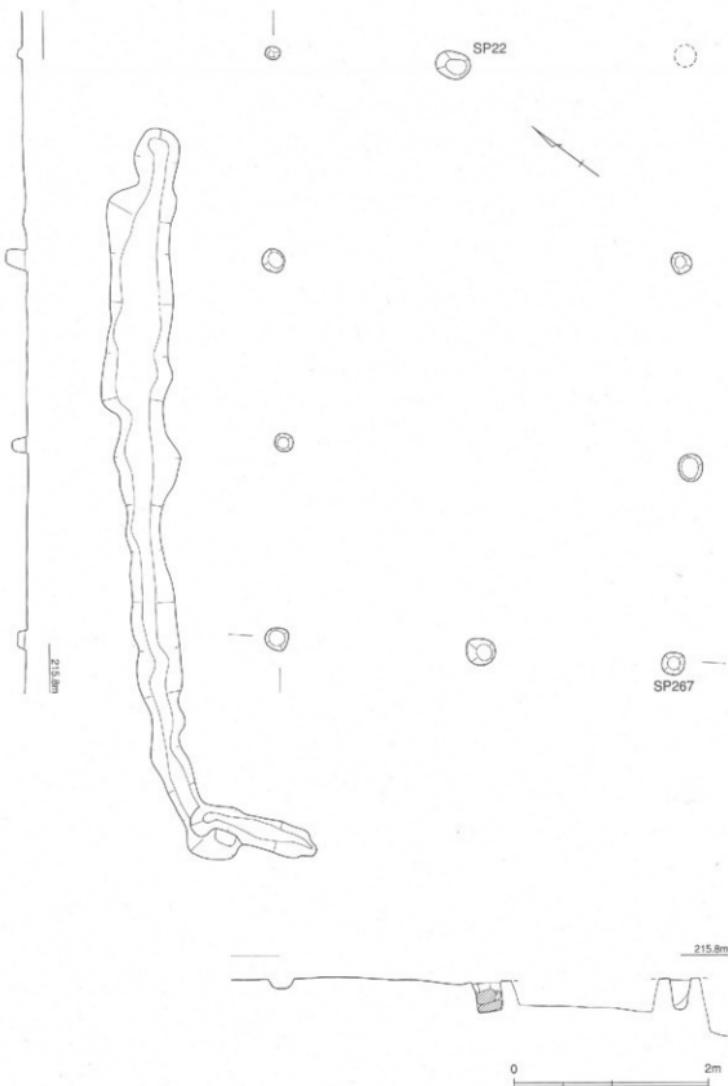


図16 SB05平・断面図

- SD01** II区南半で検出した北西 - 南東方向の溝で、長さ13m、幅50~80cmである。南端は谷部へと続いている。埋土はオリーブ褐色粘土で、須恵器塊が出土している。
- SD03** I区南半で検出した溝で、東側から2本の溝が合流して西南方向へ流れる。合流部付近での幅は1.8m、深さ30cmである。西側は田圃造成の際に削平されたため消滅している。この溝を境に、南側は遺構の分布が極めて希薄である。埋土は黄灰色系粘質土で、南肩に沿って木質部が一部残存する。
- 遺物は須恵器、土師器、陶器、青磁碗、瓦質土器などがある。13は土師器小皿で、口径8.2cmである。14は陶器擂鉢で7条の櫛搔振り目がみられ、15世紀の備前焼と思われる。
- SD07** I区北半で検出した北西 - 南東方向の溝で、長さ6m、幅20~35cm、深さ6cmである。北側は調査区外のため、南側はSD10により切られているため不明である。埋土は暗灰黄色粘性砂質土で、土師器小片が出土した。
- SD08** I区北半で検出した北東 - 南西方向の溝で、長さ5m、幅25cm、深さ8cmである。埋土は暗灰黄色粘性砂質土で、丹波焼と思われる陶器壺が出土している。
- SD10** I区北半で検出した溝で、長さ4.1m、幅50~60cm、深さ10cmである。埋土は暗灰黄色粘性砂質土で、須恵器や青磁碗が出土している。
- SD14** I区北半で検出した溝でL字形に曲がる。幅30cm、深さ12cmである。埋土は黄灰色粘質土で、13世紀後半の須恵器鉢や碗、土師器小皿15、陶器壺などが出土している。
- SD15** I区北半で検出した溝で、長さ3m、幅25~45cm、深さ10cmである。前述のSD14と同じと思われる。埋土は上層が黄灰色粘質土、下層が灰色粘土で、青磁、陶器のほかに須恵器、土師器小皿16が出土している。
- SD18** I区北半で検出した南西方向に延びる溝で、西側はI・II区間の段差により消滅している。長さ4.9m、幅50cmである。埋土は暗灰黄色粘性砂質土で、下部には砂層が確認される。陶器、土師器が出土している。
- SD19** I区北半で検出した溝で、長さ8.6m、幅30~65cmである。西端で南側に屈曲する。溝の南側の遺構面は北側より5cm高い。埋土は褐灰色粘質土で、遺物は出土していない。
- SD20** II区北半で検出した溝で、幅1m、深さ10cmである。長さ6.8m分を検出したが、西側は田圃の段差により削平されている。埋土は褐灰色粘性砂質土で、13世紀後半から14世紀と思われる須恵器、土師器が出土している。
- SD21** II区北半で検出した溝で、幅90~135cm、深さ12cmである。長さ約11mほどを確認したが、西側は田圃の段差により削平されている。埋土は灰黄褐色～褐灰色粘性砂質土で、須恵器、土師器、陶器が出土している。17は丹波焼擂鉢で、内面はよく磨減している。



図17 溝出土遺物実測図 13, 14 : SD13 15 : SD14 16 : SD15 17 : SD21

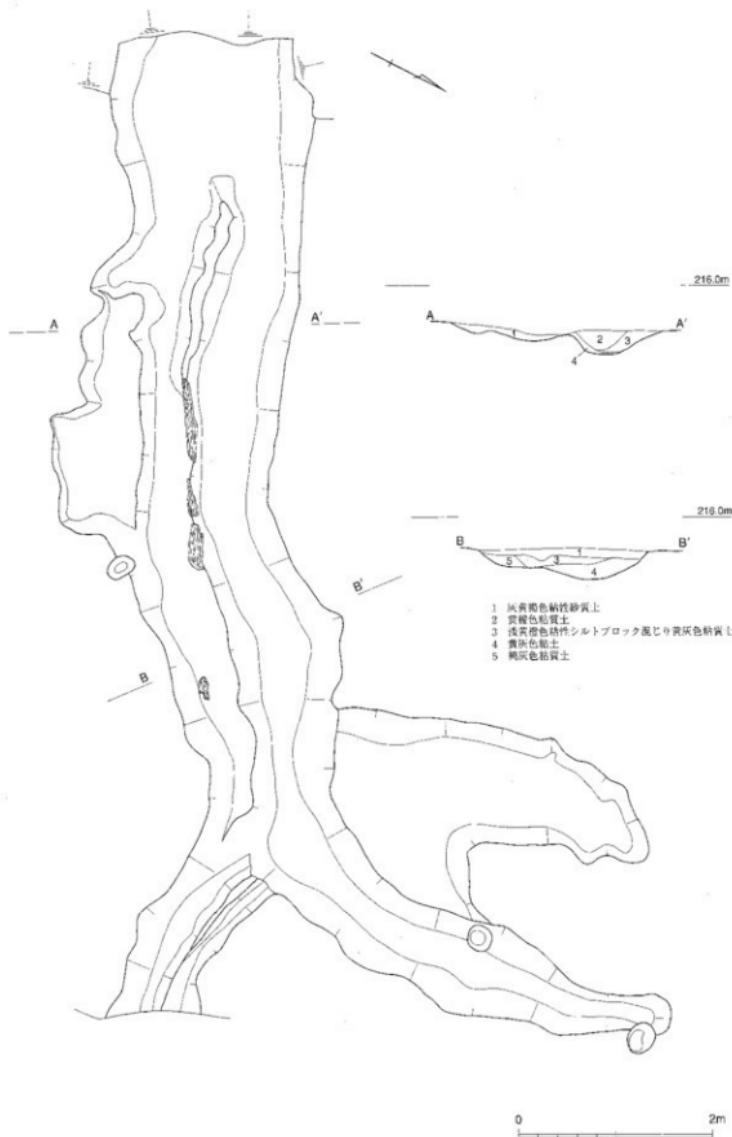


図18 SD03平・断面図

SK01 II区北半で検出した直径125m、深さ46cmの円形土坑である。埋土は上層がオリーブ褐色シルト、中層が黄褐色シルト質粘土、下層がにぶい黄橙色粘土で、上層ほど礫の含有が多い。土師器、陶器、青磁が出土している。

SK02 II区北半で検出した長径1.3m、短径80cmの楕円形土坑である。埋土は暗灰黄色シルト質粘土、下層は褐灰色粘土である。土師器が出土している。

SK03 I区北半で検出した直径85cm、深さ7cmの円形土坑である。埋土は灰黄褐色シルト質粘土から暗灰黄色シルト質粘土上、土師器、焼上、鉄製品11が出土している。

SK04 I区北半で検出した直径1.1m、深さ20cmの円形土坑で、埋土は礫を多く含む褐色砂質シルトである。

SK05 I区北半で検出した円形土坑で、直径1.6m、深さ45cmである。埋土は褐灰色シルト質粘土で、須恵器、土師器、陶器が出土している。

SK06 I区北半で検出した円形土坑で、直径1.8m、深さ45cmである。20~30cmの角礫が充満しており、遺物は須恵器、土師器、鉄滓などが出土している。また、礫中に宝鏡印塚の基礎部分と思われる破片18が含まれていた。角が残存するのみで、高さは15.6cmである。上半は反花を削りだす。底部や断面も含めて火熱で変色しているため、解体後個々に分離してから火を受けたことがわかる。石材は花崗岩である。

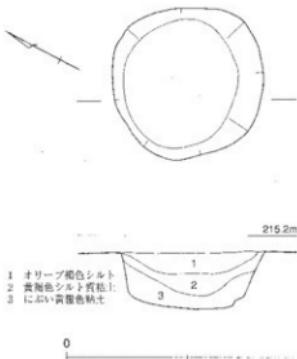
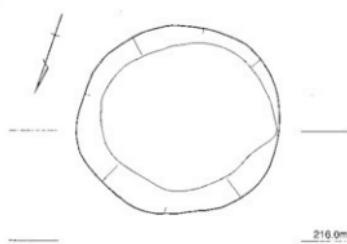


図19 SK01平・断面図



SK05
1 にじい黄褐色10YR 5/4 シルト質粘土
2 黄褐色10YR 5/1 粘土



SK06 黄褐色シルト質粘土混じり褐灰色シルト

図20 SK05, 06平・断面図

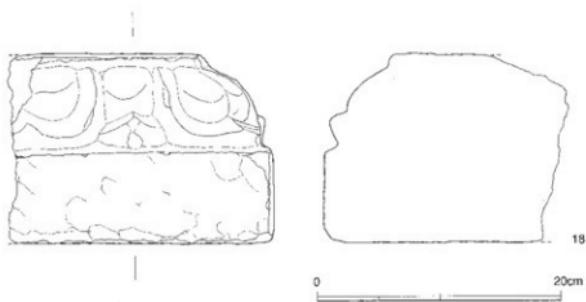


図21 SK06出土遺物実測図

SK08 I区北半で検出した円形と思われる土坑で、東側は調査区外のため不明である。埋土は上層が灰黄褐色粘性砂質土で、下層は黄灰色粘土であり、両方とも礫を多く含む。須恵器、上師器、陶器、瓦質土器などが出土している。19、20は須恵器鉢で、口径24.7～26.4cmである。21は土師器羽釜で、口径23cmである。22は瓦質土器の鍋で、口径は24.8cmである。これらは14世紀代のものと思われる。

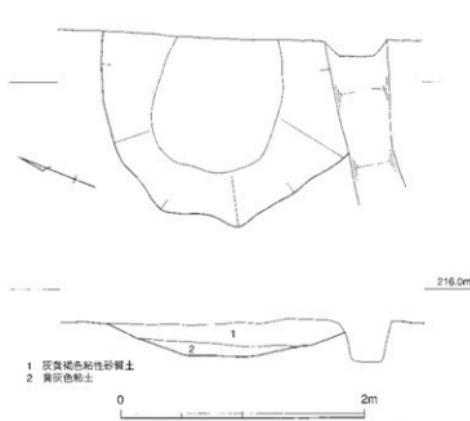


図22 SK08平・断面図

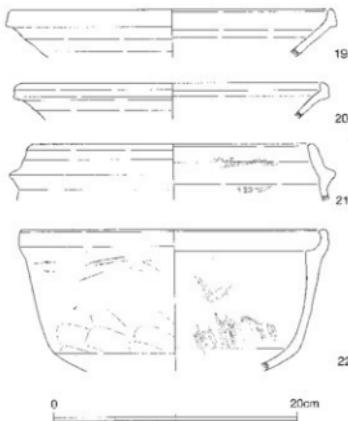


図23 SK08出土遺物実測図

SK10 II区北半の調査区西辺際で検出した長方形の土坑で、長さ3.6m、幅1.6m、深さ25cmである。主軸方向を等高線と平行にとる。ほぼ水平な底面には、主軸に沿って長さ3m、幅20cm弱の浅い溝が存在する。東辺部分で幅10cm、北辺部分で幅50cmの範囲で、炭、灰、焼土を検出した。炭には、径3cm以下、長さ5～25cm程度の形状をとどめるものも存在する。埋土は黄灰色粘性シルトで、遺物は須恵器と土師器の極小片が出土している。また、この土坑検出中の土層からは、24の土師器小皿のほか、須恵器、土師器鍋などの遺物が出土している。

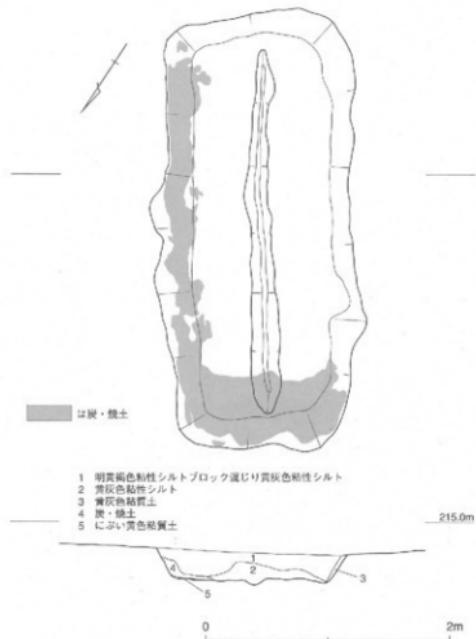
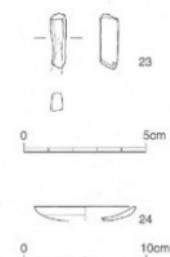


図24 SK10平・断面図

図25 SK09, 10
出土遺物実測図

SX02 I 区北半端で検出した不定形の落ち込みで、長径10m、短径5.5mを測る。西側は削平のため不明であるが、東側からSD15が流れ込み、中央の4×4.5mの範囲に礫が集中する。その内部には、30~50cmの礫が並べられたような状況で検出できており、中央部分は石組みが存在した可能性がある。埋土の下層は粘質が強い。

遺物は、須恵器、土師器、陶器、瓦質土器、磁器、鉄滓、焼土などが出土している。

上層からは須恵器碗底や鉢、土師器鍋、陶器、青磁などが出土した。

25~29は中層出土の遺物である。25は須恵器碗で、口径15.2cmである。26は須恵器鉢底部で、焼成は甘く、底径は11.6cmである。27は土師器羽釜で、口径23.8cmである。焼成は非常に堅緻である。28は土師器鍋で、口径23.6cmである。I区遺構面検出時の遺物と接合している。29は陶器擂鉢底部で、底径は14.4cmである。擂り目は1本引きで間隔が広い。よく使用されており、内面は平滑である。

30~32は下層出土の遺物である。30は須恵器碗で、口径15.6cmである。31は土師器羽釜で、鉢より下には煤が付着する。32は土師器鍋で、口径18.2cmである。SX02中層およびSD03の破片と接合している。

33~42は最下層の礫間から出土した。33は須恵器鉢で、口径26.8cmである。SX02下層

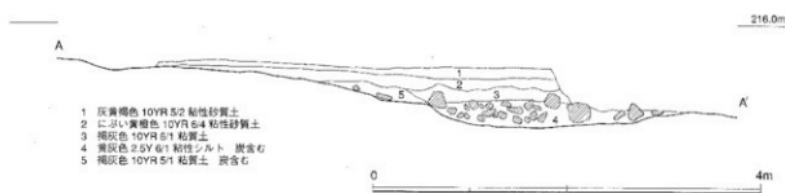


図26 SX02平・断面図

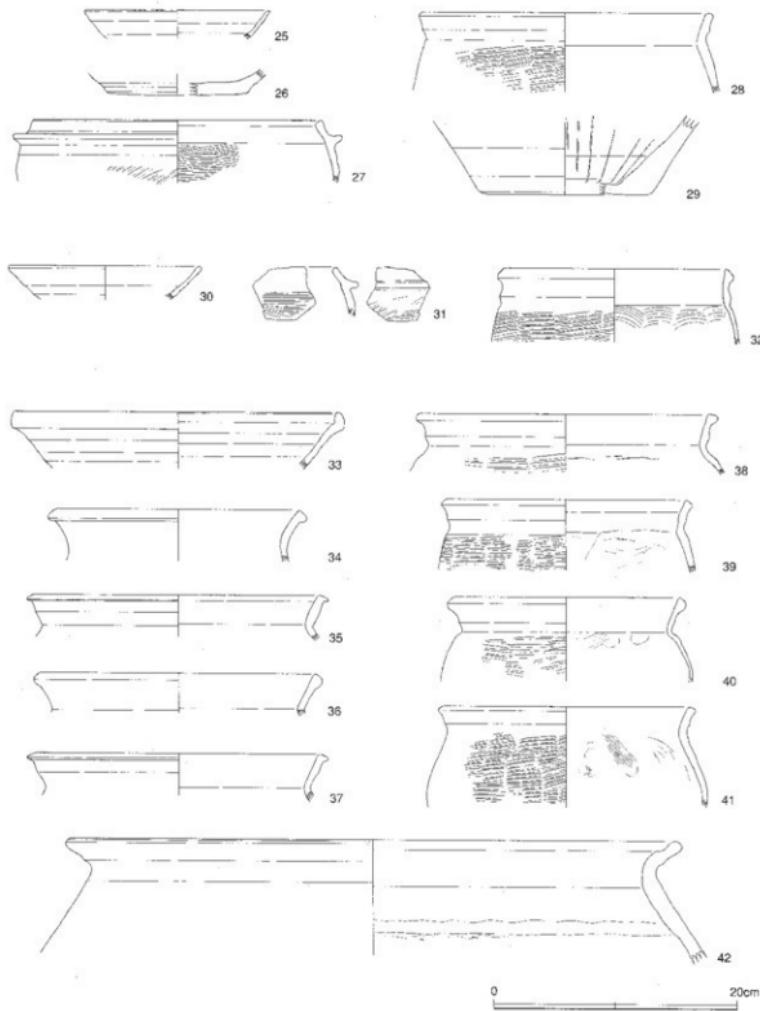


図27 SX02出土遺物実測図 25~29:中層 30~32:下層 33~42:最下層

の破片と接合している。34~37は土師器鍋で、口径は20~23.2cmである。いずれも磨滅が著しい。38~41も土師器鍋であるが、焼成は硬質である。口径18.5~23.2cmである。41の外面には煤化痕が見られる。42は陶器壺で、口径49.8cmである。口縁部内面に凹線が見られ、14世紀代の丹波焼と思われる。

SX06 1区北半で検出した落ち込みで、長さ3.5~4.5m、幅2.7mの平面台形をしており、深さ30cmである。西辺には幅約30cmの段を設ける。埋土は上層が暗褐色シルトで、下層は灰色粘土が堆積する。拳大から人頭大の礫が多く充填しており、中央には一人では動かしがたい程の石が数個存在する。

遺物は、須恵器、土師器、陶器のほか、礫間から鉄滓や輪羽口、炉壁と思われる破片が出土した。さらに、宝鏡印塔笠部や石臼も出土している。

43, 44は鉄製品で、薄い鉄板状である。

45は須恵器小皿で、口径7.7cmである。46は須恵器鉢底部で、底径10.2cmである。47は陶器擂鉢で、振り目は1本引きである。48は天目碗で、口径11.2cmである。

49は下臼で、直径30.2cm、高さ8.9cm、重さ8.18kgである。芯棒孔は直径3.2cmで下に向かって広がる。白面は膨らんでおり、目立ては半分が欠損しているため全容が不明であるが、5~6分画と思われる。すり合せ部はよく使用されているため磨耗している。また底面も磨耗が著しく平滑である。石材は花崗岩と思われる。側面から底面にかけての一部が火を受けている。約4m離れたSP28, 29出土の石臼片と接合している。

50は宝鏡印塔の笠部で、隅飾り突起を一部欠く。高さ21.1cm、幅26.4cmで、上端には相輪を、下端には塔身と接続するために4~6cmの孔が穿たれている。石材は花崗岩と思われる。火熱は受けていない。

この落ち込みからは鉄滓が多く出土したが、底面や壁面は焼成を受けた痕跡はなく、炭もごくわずかしか出土していない。その他埋土や礫の出土状況などから、鉄生産に関連する遺構である可能性は少ないと考えられる。おそらく、中世後半の製鉄関連遺構が近辺に存在し、それらが廃棄された土坑であろうと思われる。なお、鉄滓や輪羽口などについては後述する。

SX07 II区北半で検出した平面台形の落ち込みである。長さ3.2~3.6m、幅3.3m、深さ20cmで、南東側がややすまると。埋土はにぶい黄橙色粘質土と褐灰色粘質土で、北東部に集中して角礫が検出された。

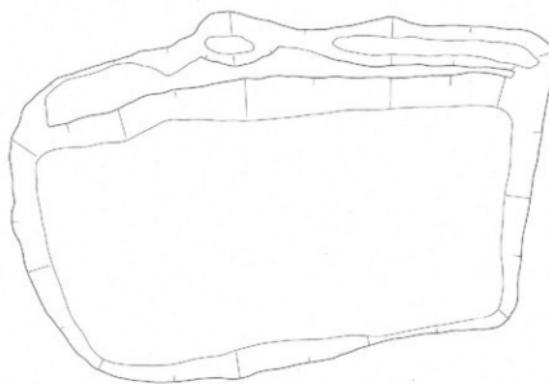
遺物は須恵器、土師器、陶器、鉄滓、輪羽口などが出土している。51は陶器擂鉢で、口径30.8cmを測る。振り目は1本引きで、内面は使用のためよく磨耗している。

SP ピットはI区北半で多数検出した。一部には柱模や木質が残るもの、石を充填するものなどがあり、その深さも考慮すると復元した掘立柱建物以外にも構造物が存在したことを見かがわせる。

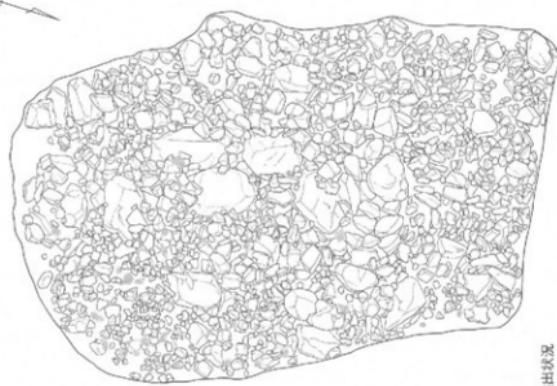
遺物は少量ながらも須恵器や土師器、鉄滓などが出土している。ほとんどは小片のため図化にはいたっていない。52はSP283出土の須恵器碗で、口径15.2cmである。53はSP276出土の土師器小皿で、口径6.8cmである。

遺物包含層 その他、遺物包含層からは須恵器、土師器、瓦器、陶器やサスカイトなどが出土している。これらもほとんどが小片のため図化にはいたっていない。

54は須恵器椀で、口径15.8cmである。55は青磁碗で口径14.4cmである。56~58は土師器擂鉢である。58は振り目が確認できなかったが、口縁部の形態や焼成などから判断した。59は土師器鍋で、口縁内部が強いナデでくぼむ。60は鉄釘で、頭部も一部欠く。



完掘状況



sondage 次况

図28 SX06平・断面図

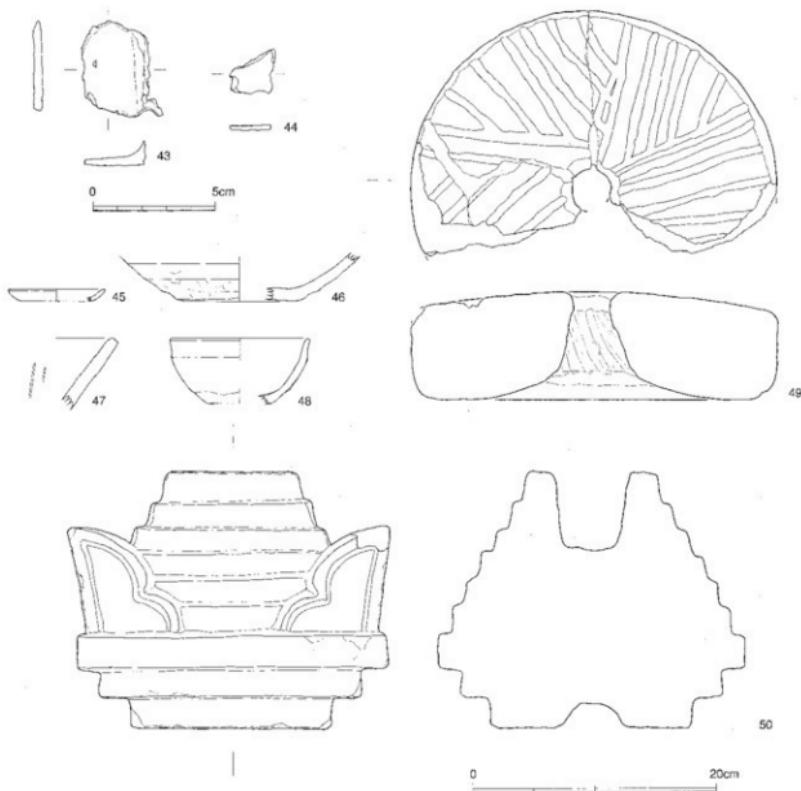


図29 SX06出土遺物実測図

第3節 小結

第1次-1調査では、調査区の東北部において多くの遺構を検出した。掘立柱建物も同時存在ではないが現時点で5棟確認でき、屋敷地が広がっていたものと思われる。西北部では、炭を焼いていた可能性が考えられている焼成土坑が1基検出されている。淡河地域では西北遺跡でも確認されており、その分布は広がりつつある。

遺物については、13世紀代と15世紀以降の須恵器、土師器、陶器などが出土した。少量かつ小片であるが、瓦器軸も存在する。また、縄文時代と思われるサスカイト片がわずかに出土している。調査では縄文土器や縄文時代の遺構などは検出されなかったが、確認調査で石錠が出上している事実と合わせて考えると、近隣に当該期の遺跡が存在する可能性が残されている。

その他、SX06からは鉄滓の出土が目立ち、今回の調査の中でも特異な遺構である。

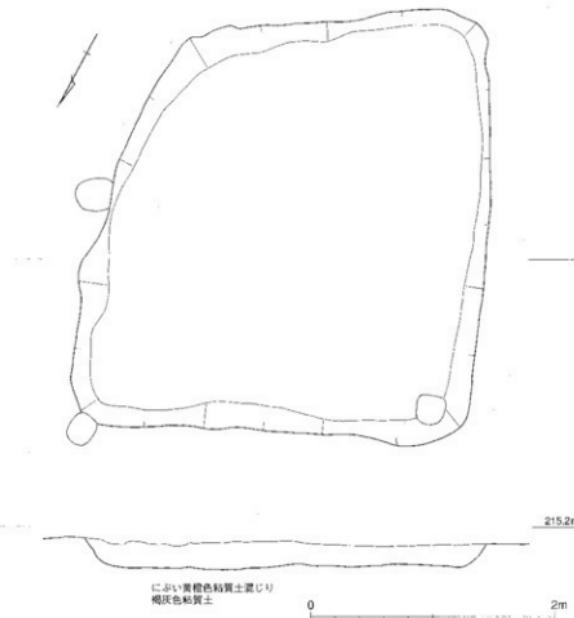


図30 SX07平・断面図

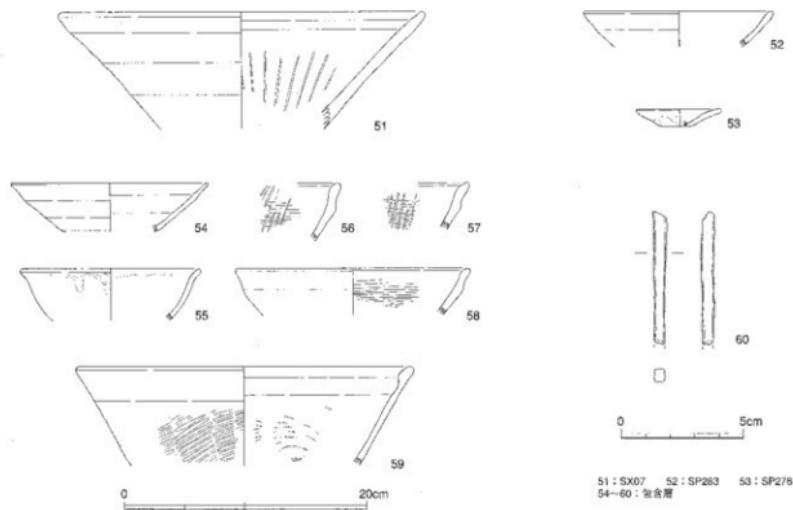


図31 出土遺物実測図

第V章 第1次-2調査

第1節 調査の概要

第1次-2調査は、確認調査の結果により遺構や遺物包含層が検出された範囲のうち、3か所の調査を実施した。それぞれを第1調査区～第3調査区と呼称する。調査の方法は、バックホーにより耕作土を除去し掘削をおこなった。そして、遺物包含層を人力により掘削し、遺構面の検出と遺構検出のための精査作業を実施した。

基本層序 いずれの調査区も耕作土の下は、床土、暗灰色系砂質土、そして中世の遺物を含む灰褐色砂質シルトの旧耕土が堆積し、黄褐色系疊混じりシルトの遺構面となる。

第1調査区 水路予定部分の調査区で、幅4m、長さ36mである。確認調査の18、19トレンチの場所にあたる。鳴川左岸の中位段丘上に立地しており、北側に向かって緩やかに傾斜する。調査区の南半分は削平をうけ耕作土直下で地山となる。地山面の標高は215.7～216.4mである。調査区の北半分では、灰褐色砂質シルトから中世の須恵器、土師器、瓦器、白磁が出土した。面精査をおこなった結果、遺構については確認されなかった。

第2調査区 水路予定部分の調査区で、幅4～6m、長さ21.5mである。確認調査の15トレンチの場所にあたる。野瀬大柏池からの谷筋にある小扇状地東側に立地しており、北側に向かって緩やかに傾斜して北端で急激に落ちていく。調査区の南半分は削平をうけ耕作土直下で地山となる。地山面の標高は217.3～218.0mである。調査区の北半分では、水田造成の際の盛土下に堆積している灰褐色砂質シルトから中世の須恵器、土師器、陶器が出土した。面精査をおこなった結果、耕作に伴う牛馬などの足跡が確認されたものの、明確な遺構については確認されなかった。

第3調査区 水路予定部分の調査区で、幅4.5m、長さ29mである。確認調査の25、27トレンチの場所にあたる。渋河川に面した中位段丘上に立地しており、西に向かって緩やかに傾斜している。東側1/3が削平をうけ耕作土直下で地山となる。地山面の標高は202.4～202.9mである。灰褐色砂質シルトから中世の須恵器、土師器が出土した。

検出された遺構は、径10cm前後、深さ10cm前後の円形と梢円形のピットが数基である。いずれのピットからも遺物は出土していない。また、長さ約1.7m、幅約1mの不定形をした落ち込みであるSX01は、地山土と暗灰色土の混じった埋土で、遺物の出土はなかった。その他、牛馬などの足跡が無数に確認されている。

第2節 遺物

今回の調査では須恵器、土師器などの遺物が出土したが、ほとんどが細片であり図化しらるものは少ない。

65～67および70～74は須恵器椀で、口径13.7～16.5cmである。61、62、68、69は須恵器小皿で、口径7.1～7.6cm、高さ0.9～1.4cmである。63、64は須恵器椀あるいは壺の底部で、

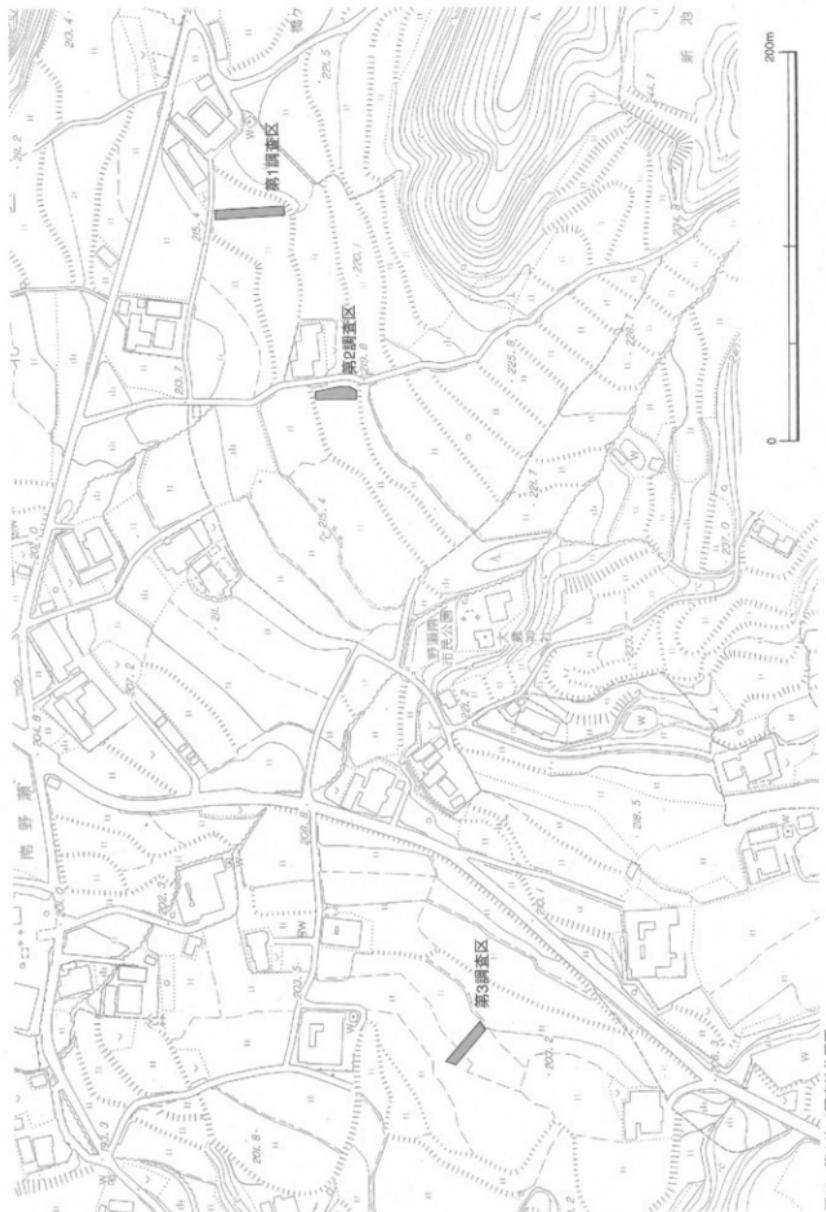


図32 第1次-2調査地位置図

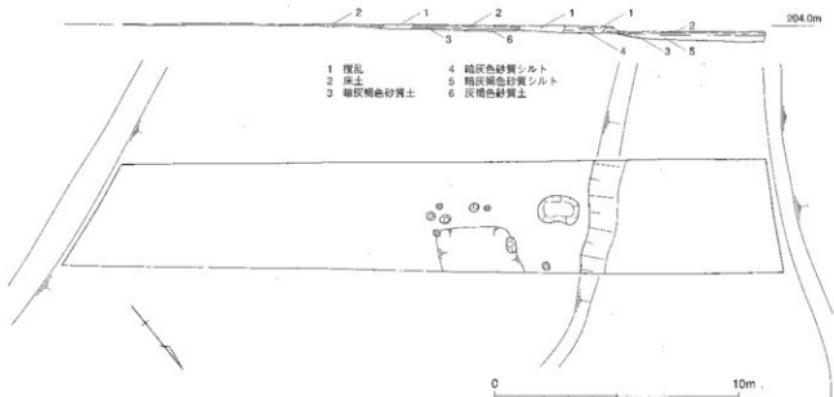


図33 第3調査区平・断面図

貼り付け高台が付く。75は須恵器鉢である。76は土師器椀と思われる底部で、底径は6.6cmである。77は青磁碗で、口径16.2cm、口縁端部がわずかに外反し、体部外面に蓮弁文を施す。

その他、須恵器甕や土師器鍋・小皿、瓦器椀、白磁碗、陶器擂鉢などが出土している。瓦器椀は、すべて第1調査区からの出土で、高台は退化してほとんど認められない。

遺物のほとんどは、13世紀から14世紀代を中心とする時期と思われる。

第3節 小結

今回の調査は、各調査区が散在しており、なおかつ範囲が限定されていたため、遺跡の性格を判断する資料は得られなかった。

遺物は主として中世の須恵器、土師器で、灰褐色砂質シルトから出土しており遺構から伴うものではなかった。第1調査区では、高台が付いて古い様相を示す須恵器も出土しており、今回の調査地の中では比較的早くに開発がなされたものと思われる。

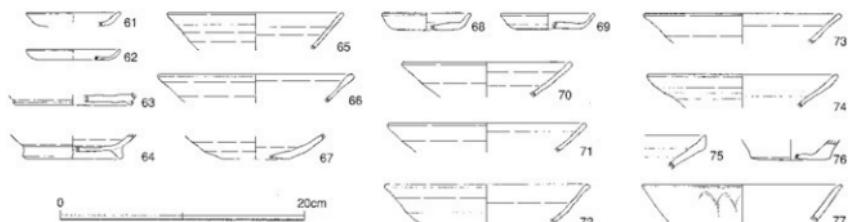


図34 出土遺物実測図 61~67:第1調査区 68~72:第2調査区 73~77:第3調査区

第VI章 製鉄関連遺物

第1次調査では、SX06を中心に鉄滓や轆羽口など鉄製品生産関連の遺物が出土した。周囲の遺構からも若干数出土しており、鉄滓の総数は400点以上、総重量は33kg以上をはかる。淡河地区では比較的まとまった資料となる。

第1節 鉄滓

ここでは計434点の資料を対象として肉眼による観察と検討をおこない、その分類と出土の傾向などを記述していきたい。

分類 各資料は、遺物台帳番号ごとに枝番をとり、形状と表面上の気泡の痕跡、炭、炉材、石などの含有物や付着物、そして溶融してガラス質になった状況などから、以下の通りA～G類の計7種に便宜的に分類した。

A類：椀形滓と認識できたもの

B類：下面の表面に礫が付着するもの

C類：ほぼフラットな下面でその表面に礫が付着しないもの

D類：塊状・礫状で面ではなく比較的気泡が多いもの

E類：塊状・礫状で面ではなく比較的気泡が少ないもの

F類：溶融しておりガラス質のもの

G類：鉄塊系遺物ではば全面を錆が覆うもの

法量は長径・短径・厚さを1mm単位で測定した。重量と水中重量は1mg単位で測定し、みかけの比重を割り出した。

組成 A類は123点(28%)、B類は60点(14%)、C類は51点(12%)、D類は76点(17%)、E類は59点(14%)、F類は35点(8%)、G類は30点(7%)を数える。

総重量は33.712kgをはかる。重量比率でいくと、A類は資料も大きく比重も重いことから、20.0415kg(59%)と比率は上がり、逆にF類はガラス質で軽いため567.8g(1.7%)となる。

表2 鉄滓出土地点別組成

	A	B	C	D	E	F	G
3tre.			1	2		2	
9tre.							1
I区		1					
SK06	3	1			2		
SP19		1			1		
SP131					1		
SP232					2		1
SX01		1	4		4		
SX02					1		
SX03		1	2	3	1	1	
SX06	119	54	43	73	45	34	28
SX07	1						

SX06からの出土例が大半を占めるため、類型別組成もその影響を強く受けている。他の遺構からは数点の出土にとどまり資料数が少なすぎるため、遺構ごとの組成を比較検討することはできなかった。

出土分布状況 鉄滓は12か所の遺構あるいは遺構面から出土した。確認調査9tre.から出土した1点を除くと、第1次～1回調査のI区北半に集中する。そのうちでも、396点(91%)、重量にして31.311kg(93%)がSX06出土である。

類型別にみると、特にA, D, F類がSX06に集中する。比較的分散して出土しているのがE類であるが、それでもSX06出土の割合は80%弱である。

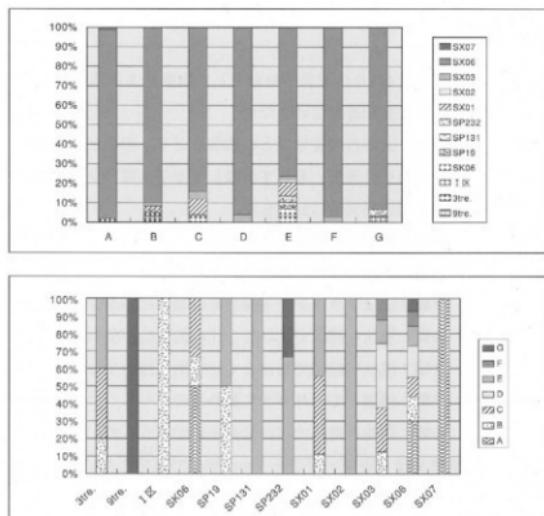


図35 鉄滓出土地点と類型

比重分布 比重の小数点以下第2位を四捨五入して資料数を累計した。平均比重は2.6177である。A類は、2.6～2.9にピークをもつ。B類は、2.4にピークをもつが、1.8, 1.9と3.0にもピークが認められ、1.8～3.0まで満遍なく分布する。礫を比較的多く含むための結果と思われる。C類は、2.5にピークをもつが、分布は高い方へ偏る。平均比重は2.6939である。D類は、同じく2.5にピークをもつが、若干低い方へ偏差する。これは気泡の多さに起因するものと思われる。E類は、2.5と2.8にピークをもつ。2.1にも小さなピークがあり、細分可能なかもしれません。F類は、2.1～2.2および1.5にピークをもつ。ガラス質のため他の資料よりは明らかに軽い。G類は、2.6にピークをもつ。

楕形滓と気泡が少ない資料であるA, E類がやや高めの比重値を示している。

断面の観察 各類型1点ずつを断面観察用の資料に供した。資料のはば中央を岩石用切断機で切断して、研磨材#1000～#3000で切斷面をととのえ、硝酸アルコールによるエッティングを数分間おこない、ダイヤ液(3μm)で鏡面研磨をおこなった。

資料を金属顕微鏡を用いて、その組織を観察した。その結果、スケールの異なるヴィスタイト、ファイライライト、非金属介在物、あるいはヴィスタイト+ファイライライトなどの

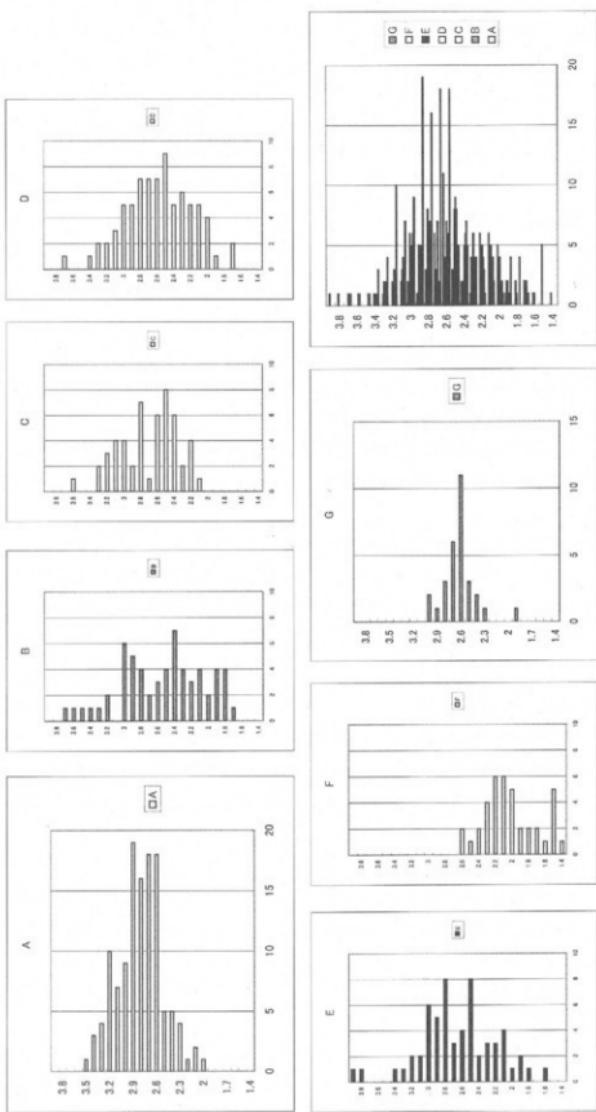


図36 錫型別比率分布

組織が確認できた。これらの他にも認識できていない組織もある。1個体の中でも部位による変化が大きく、各グループでのマクロ的な特徴を導き出すにはいたらなかった。しかし、傾向としては2~3グループに分けられそうであるが、今後の課題としたい。

元素分析調査をおこなっていないため、これらの鉱滓の原材料やどの工程で発生したものは、明らかにできない。しかし、鉱滓の形状、比重、金属組織からいくつかのグループに分けられるということは、この地で一連の各工程の作業が継続的におこなわれていたことを証している。

第2節 輸羽口・炉壁

鉱滓のほかに製鉄関連の遺物として、輸羽口と炉壁が出土している。

輸羽口 輸羽口は、SK02, 06, 15, 16, SX01, 03, 06, SP232, 239などから60片以上出土しているが、先端部は遺存するものの吸気口部は失われており全長をうかがい知る資料はない。また接合可能な破片も少なく、正確な個体数は不明である。

羽口先端部は石材などが溶融しており、ガラス質になっている。ガラス質範囲の下端すなわち吸気口部側のラインは、羽口の孔の中心軸に対して、約80度の傾きがある。このことから、炉壁への接続角度状況がうかがえる。また、融着物のため、先端部のほうが若干太い。

以下、実測した資料について概説する。

78はSX06出土で、外径9.9cm、内径2.6cmを測る。先端部には白色粒が付着する。溶融部分の下端は孔中心軸に対して82°の傾きを持つ。79はSX06出土で、外径9.3cm、内径2.8cmを測る。溶融部分の下端は孔中心軸に対して81°の傾きを持つ。溶融部分は黒色が基本である。80はSX06出土で、外径10.4cm、内径3.2cmを測る。上端はオリーブ灰色を呈し比較的滑らかで、1~2mmの白色砂粒を含む。溶融部分の側面は気泡が多い。81はSX07出土で、外径9.0cm、内径3.2cmを測る。他の羽口より器壁が薄い。

その他の破片では、内径は2.4~4.0cmの範囲で、3.0cm前後が多い。外径は10.6~12.0cmの範囲である。ただ1点のみ、外径が16.8cmに復元できる破片が存在する。福島県山田A遺跡の3号製鉄炉出土例からすると、外径の大きさから、通風管の可能性も考えられる。

炉壁 炉壁は数十片出土しているが、小片が多い。面が生きている資料も何点かは存在する。絶対量が圧倒的に少なく、調査範囲外に投棄されたものと考えられる。

第3節 小結

最も多くの鉱滓が出土したSX06は、既述のとおり製鉄造構の本体ではなく廃棄土坑と思われる。輸羽口や鉱滓が出土したことから、近接地に大鋳冶関連の遺構が存在した可能性が高いが、今回の調査では検出できなかった。

淡河地域では、他の遺跡でも鉱滓が出土している。勝雄遺跡では、第2次調査第4トレ



図37 鶴羽口実測図

ンチから椀形滓を含む鉱滓が出土している。西北遺跡からも鉱滓や焼上などが出土している。また、淡河地域とは山を隔てて南側に所在する山田・中遺跡からは、中世の鍛冶炉が発見されており、丹生山系を中心とするこれらの資料に注目することで、中世から近世におけるより詳細な金属、あるいは金属器生産の実態が把握できるであろう。

鉄滓は表面観察だけでは製錬滓か精錬滓かの判断がつかないため、野瀬遺跡の資料がどの段階で生じた滓かは不明である。元素分析調査はおこなっておらず、今回は資料の提示をするにとどまった。

また表面観察だけであえて分類をおこなったが、はたしてその分類基準が妥当であったのかどうか、分析項目や方法も含めて再検討しなければならないと考えている。

参考文献

- ・福島県教育委員会 「福島県文化財調査報告書第333集 相馬開発関連遺跡調査報告V」 1997
- ・鈴木正貴・藤山誠一「愛知県における鉄器生産を考える(4)」「研究紀要」第1号 財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター 2000
- ・藤山誠一・鈴木正貴・堀木真美子「愛知県における鉄器生産を考える(5)」「研究紀要」第2号 財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター 2001

第VII章 まとめ

今回の調査では、中世を主とする時期の遺構、遺物を検出できた。特に第1次-1調査の東北部においては遺構が濃密に存在し、集落景観を復元するための一資料となった。第1次-2次調査では顕著な遺構が検出されなかったため、ここでは第1次-1調査の結果を中心に検討して、各遺構と遺物のまとめとしたい。

遺構は、ピットや土坑、溝、落ち込みなどが存在する。遺物包含層は薄くて残存状況が悪い。また、耕土直下で遺構面を検出した部分もあり、遺構の多くは削除を受けていると思われる。出土した遺物は、小片が多く量的にも少ない傾向であった。その中でI区北半は確認調査時点から掘立柱建物の存在が推定された場所である。

掘立柱建物は5棟復元できた。柱穴からの出土遺物が少なく、明確な時期の把握は困難であるが、遺構の切り合いなどから前後関係を類推したい。

まずSB01の柱穴は、15世紀代の土師器鍋が出土する落ち込みを掘削後に検出した。

SB02はSB01と近接しすぎているので、同時期に存在はしていないであろう。また、SB02の東側に付随する溝は、SB03に付随する溝に切られている。

SB04の柱穴はSK06を切っている。SK06は13世紀代と思われる須恵器碗や土師器鍋が出土しているが、石造品と鉄滓も存在することから、同じく石造品と鉄滓が出土したSX06とほぼ同時期の16世紀代ではないかと推定される。従って、SB04も16世紀以降とらえられる。また、SB04のみが南北棟と考えられる。

SB05の柱穴はSX02の埋土上層から切り込んでいる。SX02は、13世紀代の遺物も出土しているが、14世紀代と思われる丹波焼甕が最下層から出土している。したがって、SB05は15世紀以降の時期になると思われる。また、SB03とSB05は比較的近似した主軸の方向性をとっており、同時に存在していた可能性も考えられる。

以上から、SB02→SB03, 05→SB01→SB04となるであろうか。現在とさほど変わらない場所に屋敷が占地していた仮定すると、屋敷地は北側にさらにひろがり、建物の数はもっと多かったのではないだろうか。また他にも柱痕が確認されたり、深いピットがあるなど、柱穴としての機能が考えられるものが存在している。復元した以外にも掘立柱建物が存在した可能性は高い。瓦はごく少量しか出土しておらず、これらの掘立柱建物は瓦葺きではなかったと思われる。

土坑については、特徴的なSK10が存在する。この遺構は、炭や焼土の出土状況、平面形などから焼成土坑と思われる。主軸は等高線に平行し、突出部は認められなかった。遺構の性格として炭を焼いていた可能性が考えられているが、当遺構は地盤の焼成の度合いが少なく生産性は低かったのではないかと思われる。焼成土坑は淡河町地域では西北遺跡においても確認されており、同遺跡でも鉄滓や焼土塊が出土している。炭の供給は必ずしも鉄や鉄製品の生産に直結するとは限らないが、何らかの関連性がうかがえるのではないかだろうか。

その他、礫が多く出土したSK06の北側に同様な形状をしたSK05が存在する。SK11

とSK13も近接した位置にあり、I～II区間の段差際にも円形土坑が2基並ぶ。このように、あたかも2基ずつ組みで存在する例がみられた。

不定形な落ち込みSX02は、西側が削平されて不明であるが、埋土の堆積状況や形状から池であったと考えられる。北東側から接続する溝が、導水の役割を担っていたのかもしれない。土器も調査区内では比較的多く出土している。

遺構から出土した遺物が特異であったのがSX06である。この遺構からは、多くの疊とともに鉄滓が出土し、鉄生産あるいは鉄製品生産の場とも考えられた。しかし、底面や側面の土壤は酸化還元状態になっておらず、焼成は受けていないと思われる。また、周間にピットは無く、覆い屋的存在は認められない。さらに鉄滓の出土状況は、疊とともに廃棄された状態であり、以上から当遺構が生産に直接かかわるものではないと考えられる。炉壁片の出土量が少ないことも傍証になろう。おそらく製鉄関連遺構がごく近辺に存在し、そこからの鉄滓や薙羽口が廃棄された土坑であると思われる。しかし、確認調査の4～8トレーナーでは鉄滓などは出土していない。大きく削平されていないとすれば、I区南半の東側あたりがその候補地となろうか。

遺物に関しては、須恵器、土師器、陶磁器などが出土している。瓦器もごくわずかではあるが確認された。須恵器では椀、土師器では鍋が多い。陶器はその多くは丹波焼と思われる。また、すべて包含層からの出土であるが、土師器擂鉢が数点確認できた。その他特徴的な遺物として、鉄滓と薙羽口が比較的多量に出土している。

遺物の時期は13世紀から16世紀が主体である。平安時代以前の遺物はほとんど認められず、野瀬遺跡では13世紀以降に本格的な集落形成が始まったものと思われる。ただし、今回の調査では13世紀代の明確な遺構は検出できておらず、課題が残されている。

その他、縄文時代と思われるサヌカイト片がわずかに出土している。縄文土器や縄文時代の遺構などは検出されなかったが、確認調査ではサヌカイト製石錐とチャート製石錐が出土している事実と合わせて考えると、近隣に当該期の遺跡が残存する可能性がある。

野瀬における本格的な発掘調査は今回が初めてであり、不明な点も多い。その中で、中世における集落形態を復元するうえで、以上のような成果を得られたことは重要である。今後の調査において資料の蓄積と整理が進めば、考古学的見地から導き出される野瀬の歴史も、さらに明らかになるであろう。

写 真 図 版



1. 野瀬遺跡遠景（東から）



2. 野瀬遺跡遠景（北から）

図版 2

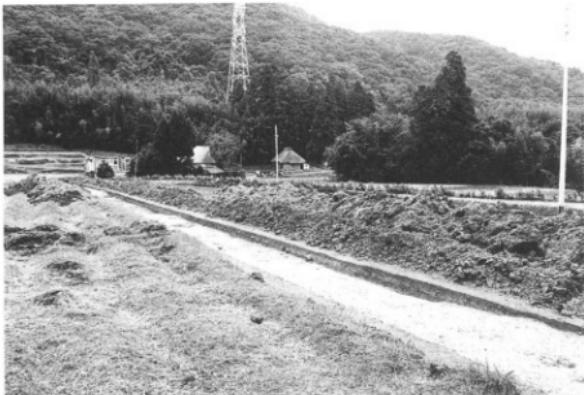


1. SX06 出土錫羽口 (78~80)



2. SX06 出土鉄滓

確認調査 図版 3



1. 3tre. (北から)



2. 22tre.-a (北西から)



3. 25tre.-a (南から)

図版4 第1次-1調査



1. 調査地全景（西から）



2. 調査地全景（東から）

第1次-1調査 図版5



図版6 第1次-1調査



1. SD03 (南西から)



2. SD20, 21 (北東から)



3. SK05 (北西から)

第1次-1調査 図版7



1. SK06礫検出（北西から）



2. SK06半掘（北西から）



3. SK08（南西から）

図版8 第1次-1調査



1. SK10 (北西から)



2. SK11, 13 (北西から)



3. SX02 (北西から)

第1次-1調査 図版9



1. SX06 (北東から)



2. SX06半掘 (北西から)



3. SX07 (北西から)

図版10 第1次-2調査



1. 第1調査区（南から）

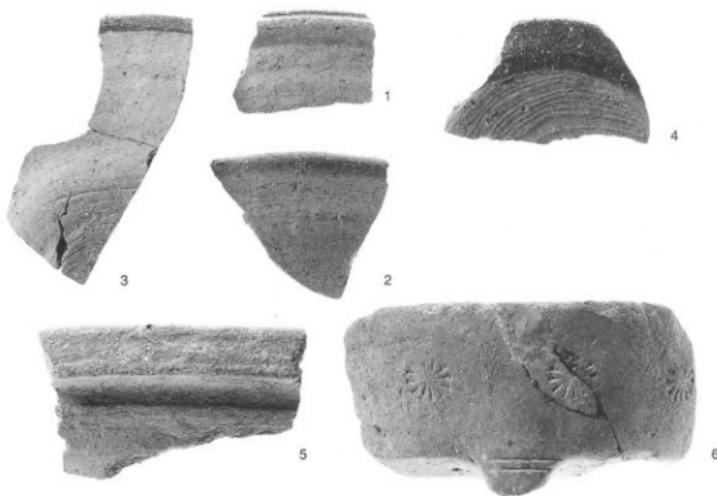


2. 第2調査区（南から）



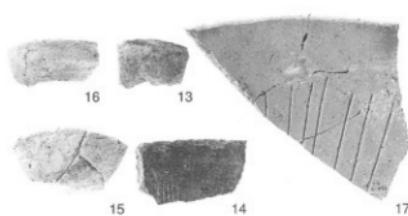
3. 第3調査区（南東から）

確認調査 図版11



同左 X線写真
(3mm 60Kvp 40sec)

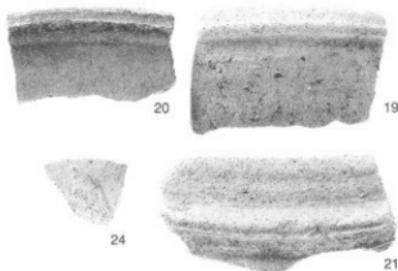
図版12 第1次-1調査



1. 溝出土遺物



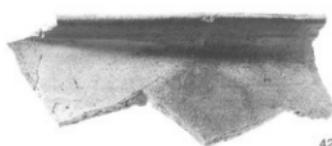
2. SK06 出土石造品



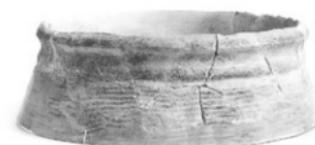
3. SK08, 10 出土遺物



22



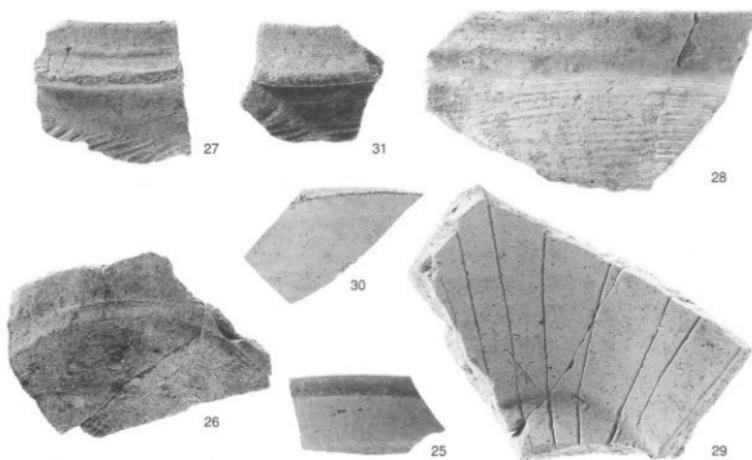
42



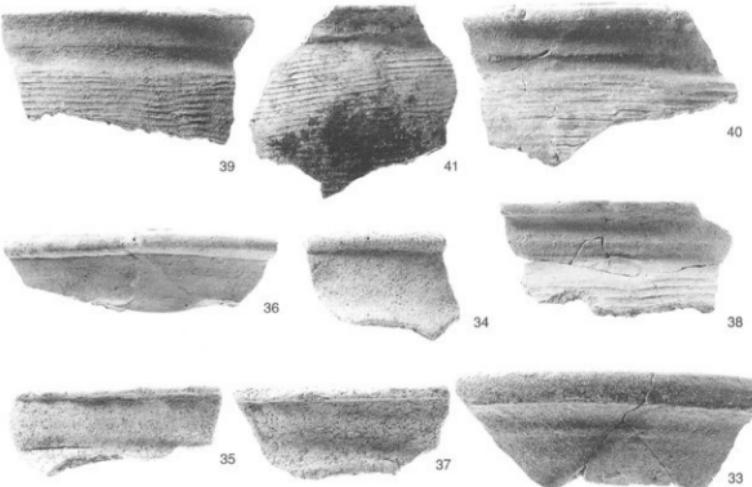
32

4. SX02 出土遺物

第1次-1調査 図版13

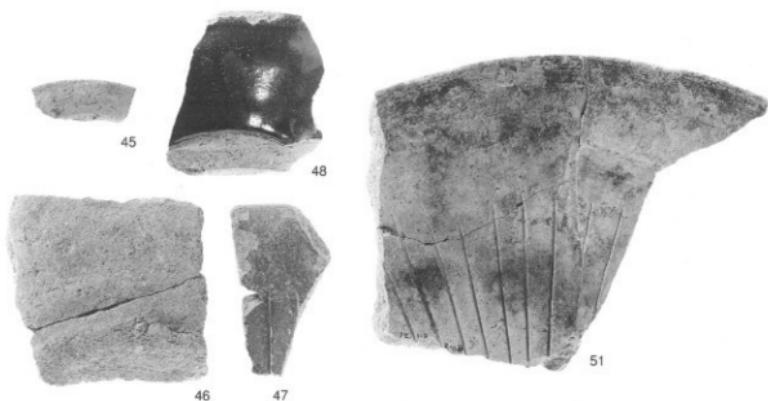


1. SX02 下層出土遺物



2. SX02 最下層出土遺物

図版14 第1次-1調査

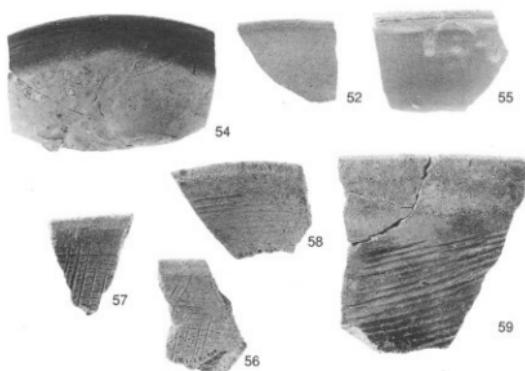


1. SX06, 07 出土遺物

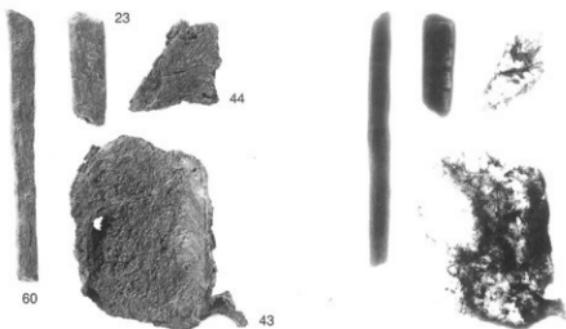


2. SX06 出土遺物

第1次-1調査 図版15



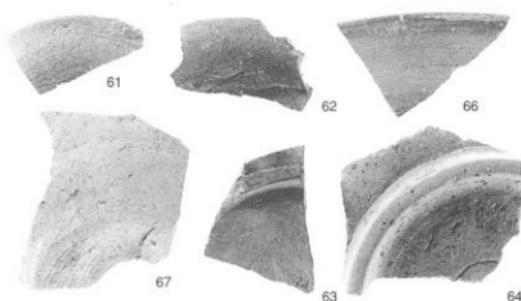
1. 包含層・ピット出土遺物



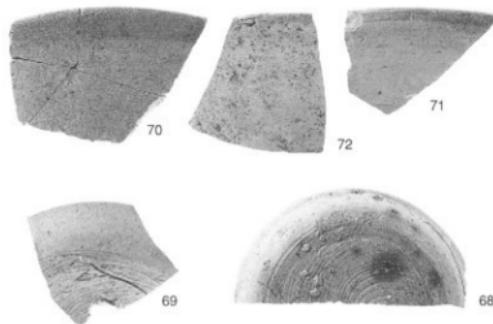
2. 包含層ほか出土金属器

同左 X線写真 (3mA 60kVp 40sec)

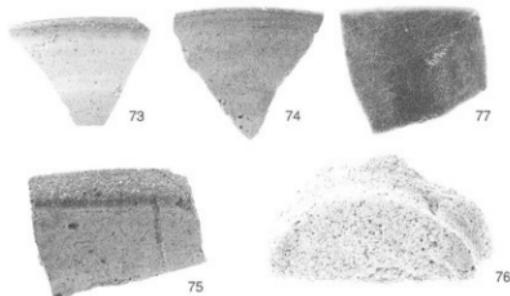
図版16 第1次-2調査



1. 第1調査区出土遺物

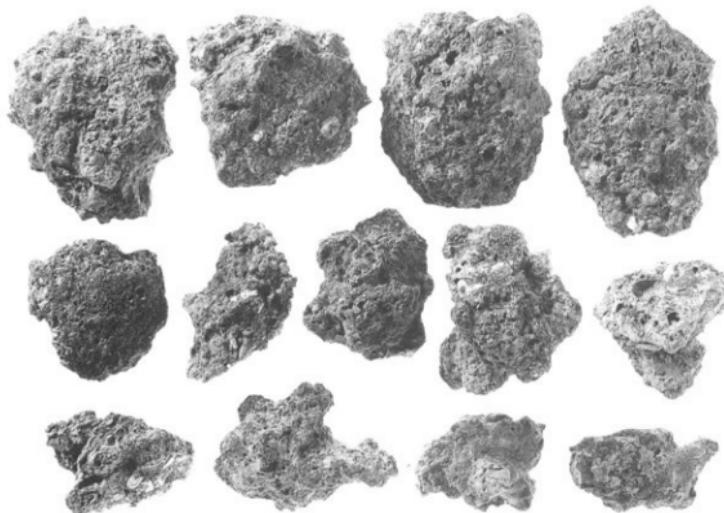
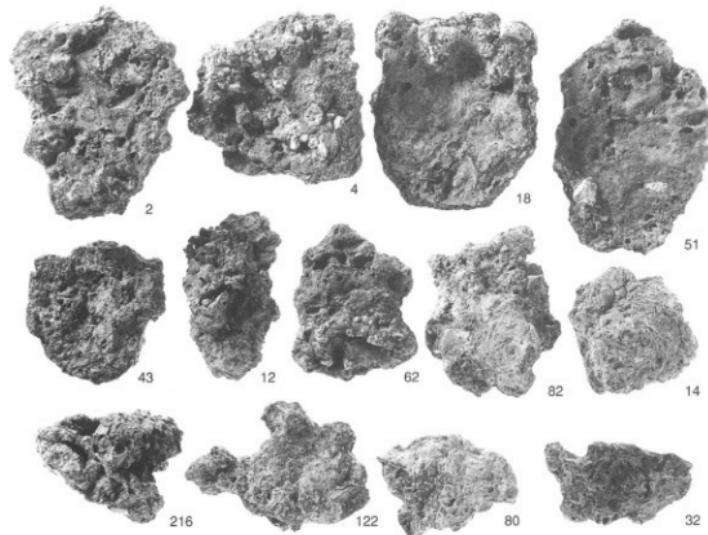


2. 第2調査区出土遺物



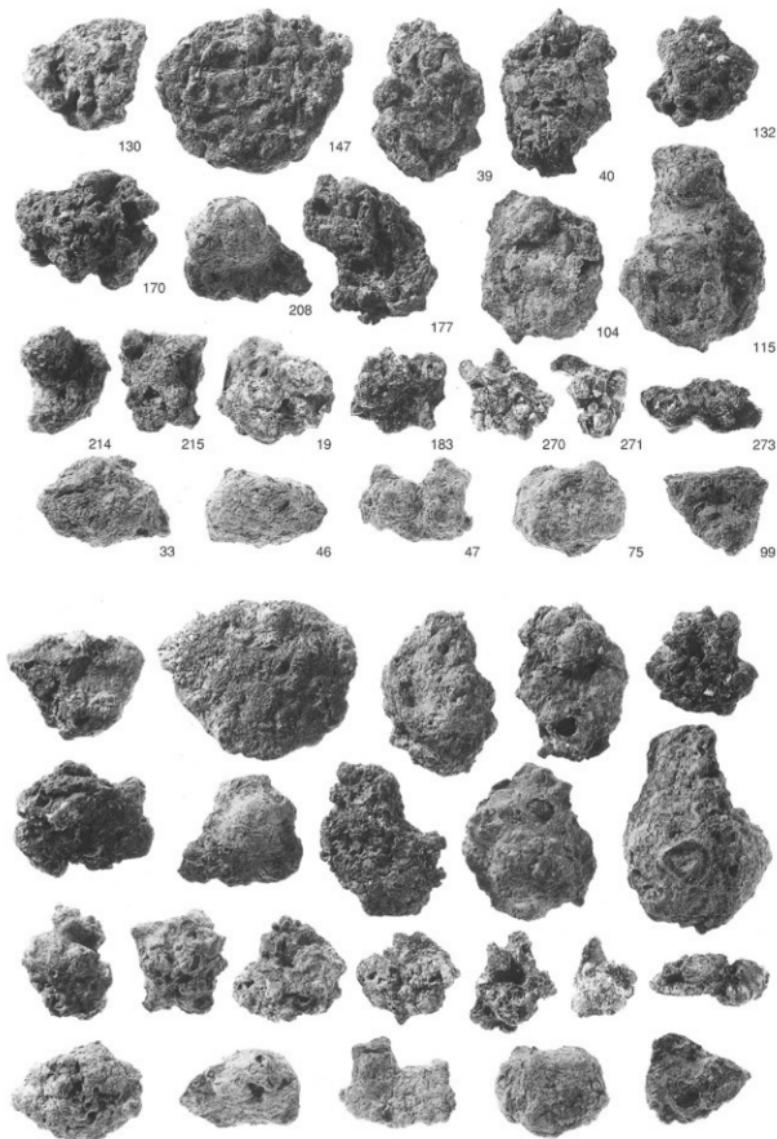
3. 第3調査区出土遺物

図版17

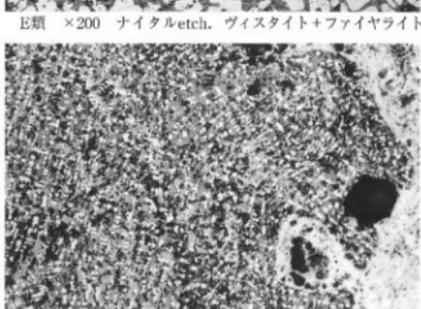
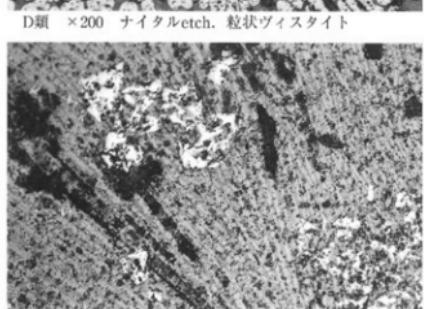
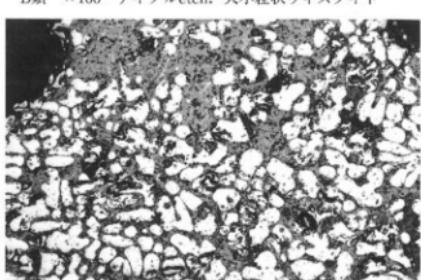
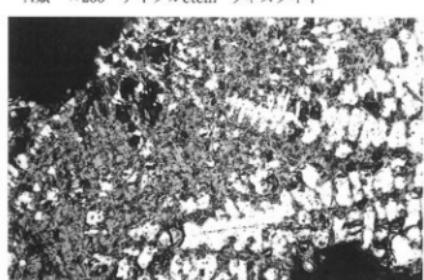
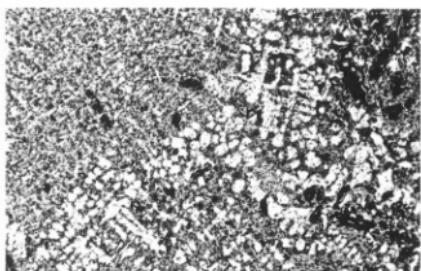
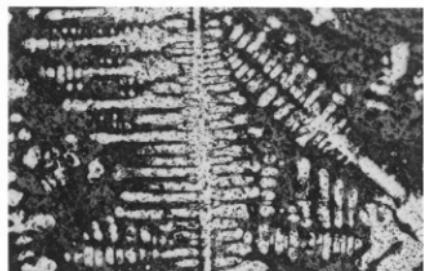


SX06出土鉄滓（1）

図版18



SX06出土鉄滓 (2)



報告書抄録

ふりがな	のせいせき							
書名	野瀬遺跡							
副書名	淡河地区農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	佐伯二郎(編)・阿部敬生・井尻格							
編集機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL.078-322-6480							
発行年	西暦2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野瀬遺跡	兵庫県神戸市	28109	392	34°	135°	確認調査 2000.11.07~ 2000.12.25	1198m ²	淡河地区
	北区			48'	08'	第1次-1 2001.12.13~ 2001.10.20.5	2000m ²	農業基盤 整備事業
	淡河町野瀬			44"	05"	第1次-2 2001.10.26~ 2001.10.21.3	380m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野瀬遺跡	集落跡	鎌倉時代~室町時代	掘立柱建物・ 土坑・溝	須恵器・土師器・ 陶器・鉄滓・ 輪羽口				

野瀬遺跡

—淡河地区農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2002.3.31

発行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL.078-322-6480

印刷 岡村印刷工業株式会社

奈良県高市郡高取町草木215

TEL.0745-62-2701

神戸市広報印刷物登録・平成13年度 第261号(広報印刷物規格A-1類)

